

6

長野県松本市今井こぶし畑遺跡 緊急発掘調査概報

昭和48年度

1974.3

長野県中信土地改良事務所
長野県松本市教育委員会

序

今井こぶし畑地籍は、かねてから埋蔵文化財包蔵地として注目されていた所ですが、本調査は長野県中信土地改良事務所所管の県営ほ場整備事業にともなって、本教育委員会に同地の緊急発掘調査が委託されたものであります。

本教育委員会は、松本市今井こぶし畑遺跡調査会を結成し、日本考古学協会員原嘉藤氏を団長とする調査団を編成し、11月28日より一週間にわたって調査が行なわれました。

調査は、調査員各位の熱意と地元土地改良区関係各位の協力によって、酷寒の中を進められ、その結果、全国でも珍しい縄文早期と推定される環状列石を含む集石遺構が確認されたので、さらに、文化庁・長野県教育委員会の指導を得て、12月21日より5日間、市教育委員会による第二次調査を行ない、学術上貴重な資料を得ることができました。

本書はその結果を集録したものであり、今後さらに精細な学術調査及び遺跡の保存を図る上で、貴重な資料となるものであると考えるしだいであります。

終りに、文化財保護に多大な理解を示された関係各位に心から謝意を表して序といたします。

昭和49年3月15日

松本市教育委員会教育長

大 和 良 平

松本市今井こぶし畑遺跡調査会役員

職名	氏名	所 属
会 長	大 和 良 平	松本市教育委員会教育長
理 事	藤 井 武 彦	" 教育次長
"	山 本 忠 博	" 参事 庶務課長
" (常務)	小 林 春 実	" 社会教育課長
"	藤 沢 宗 平	松本深志高等学校教諭中信考古学会代表
"	上 条 貞 良	額川右岸土地改良区県営ほ場整備事業代表
監 事	田 中 金 藏	松本市中信平開発事務所長
"	森 村 菊 治	額川右岸土地改良区県営ほ場整備事業代表
幹 事	田 堂 明	松本市教育委員会社会教育課文化係長
"	丸 山 栄 一	松本市教育委員会社会教育課文化係

松本市今井こぶし畑遺跡調査団

職名	氏名	所 属 名
団 長	原 嘉 藤	日本考古学協会員
調 査 主 任	小 松 虔	"
調 査 員	樋 口 昇 一	"
"	倉 科 明 正	長野県考古学会員
"	大 久 保 知 巳	"
"	神 沢 昌 二 郎	"
"	熊 谷 康 治	"

松本市今井こぶし畑遺跡調査運営委員

氏 名	氏 名	氏 名
倉 橋 一 夫	村 山 達 雄	桜 井 昭 二
上 条 万 藏	村 山 達 剛	桜 井 正 信
村 山 文 人	村 山 光 宏	村 山 今 朝 人
倉 橋 好 夫	中 沢 幸 也	村 山 水 規 夫
桃 井 昭 治	中 沢 伸 一	清 三 村 一 夫
倉 橋 正 吉	霜 古 田 昇 男	幹 事 林 清 美
佛 上 芳 武	霜 古 田 鉄 男	平 上 林 文 吉
古 田 盛 治	清 沢 和 民	上 杉 条 文 郎
小 倉 松 峰 人	蛙 川 川 雄	田 山 堂 德
	清 水 美 寿 雄	田 山 堂 明 一
	桜 井 三 文 治	丸 山 栄 一



例 言

1. 本書は昭和48年12月から49年1月にかけて行なわれた松本市今井こぶし畑遺跡の緊急発掘の報告書であるが、実際には調査は完了しておらず、その考察は完備したものではないが、発掘調査の終った部分の実状により一応考察を加えてある。
2. 調査が越冬中で行なわれ、かつ期日に制限があったため積石遺構の実測にも不備はまぬかれなかった。
3. 調査の主体部となった地域は、調査前に地表下約1mの除土が行なわれたため、その土層中の遺構の確認ができず、ただ遺物と、伝承によりこれを考察した。
4. 報告書の執筆分組は別記の如くであるが、その内容の責任は執筆者にある。
5. 執筆内容の検討は、時間の関係で充分でなく、今後の調査結果にまつものが多い。
6. 本書の編集は原嘉藤・小松度があたった。

目 次

序	松本市教育委員会教育長 大和 良平	1
例 言		3
本文目次・図版目次等		4
第 1 章 遺 跡 の 環 境	原 嘉 藤	
第 1 節 自 然 環 境		7
第 2 節 歴史考古学的環境		7
第 3 節 こぶし畑遺跡の地質(予察)	郷原 保美	8
第 2 章 遺 構 の 状 態 と 調 査 経 過		
第 1 節 調 査 日 誌	原 嘉 藤	10
第 2 節 集石遺構を含む各グリットの所見	大久保知巳	13
第 3 節 第 4 号弥生住居址	小 松 虔	19
第 4 節 土師時代の住居址	神沢昌二郎	20
第 5 節 その他の遺構	倉科 明正	21
第 3 章 遺 物		
第 1 節 縄 文 土 器	大久保知巳	23
第 2 節 弥 生 土 器	小 松 虔	26
第 3 節 石 器	倉科 明正	29
第 4 節 配石遺構と陰刻文を有する石	大場 善雄	32
第 5 節 土師時代以後の遺物	神沢昌二郎	33
第 4 章 考 察	原 嘉 藤	
第 1 節 複合遺跡であること		35
第 2 節 集石遺構について		37
第 3 節 遺跡の不連続性について		39

図 版 目 次

口 絵 集 石 中 心 部 全 影

図版 1	東方からみた遺跡	41
図版 2	西方からみた遺跡	41
図版 3	集石址全景	42
図版 4	F,Gグリット2区の第1及び第2環状組石	43
図版 5	HT1区第3環状組石	43
図版 6	Hグリット拡張1区の第4環状組石	44
図版 7	Fグリット2区の第5環状組石	44
図版 8	I・Hグリット各4・5区の第3積石部	45
図版 9	Iグリット2区のピット状遺構と遺物	45
図版 10	南方からみた第1号住居址第2号住居址	46
図版 11	土 師 器	46
図版 12	第1号土師住居址	47
図版 13	第2号土師住居址	47
図版 14	各 種 配 石	48
図版 15	縄文早期山形文土器片(第1類土器)	49
図版 16	G2,-50cm押型文土器出土状況	50
図版 17	線刻のある石	50
図版 18	町田市田端遺跡出土線刻の石	51
図版 19	縄文第3～7類土器	52
図版 20	縄文第2類・3類土器	53
図版 21	弥生住居址出土土器	54
図版 22	A～O地域出土弥生土器	55
図版 23	A～ソ地域出土弥生土器	56
図版 24	A～O, A～ソ地域出土弥生土器底部	57
図版 25	布目痕のある弥生式土器底部	58
図版 26	土師住居址出土の須恵器	59
図版 27	調査地区出土の各種石器	60

挿 図 目 次

第 1 図	今井こぶし畑遺跡付近地形図と縄文遺跡の分布	61
第 2 図	遺跡地帯の地質断面	9
第 3 図	調査地区全域実測	62
第 4 図	調査地区グリット実測	63
第 5 図	集石部平面実測	64
第 6 図	第 3 号住居址と第 4 号住居址	66
第 7 図	土師第 1 号・第 2 号住居址実測	67
第 8 図	D トレンチ土壌実測	68
第 9 図	I トレンチ拡張部 A10 の土壌実測	68
第 10 図	各地区壁層断面	70
第 11 図	線刻のある石の拓影	71
第 12 図	縄文第 1 類土器拓影	72
第 13 図	縄文第 2 類・3 類土器拓影	73
第 14 図	縄文第 3 類・4 類・5 類・6 類・7 類土器拓影	74
第 15 図	第 4 号住居址出土弥生土器拓影	75
第 16 図	A～S 地区出土の弥生土器拓影	76
第 17 図	A 地区出土弥生土器拓影	77
第 18 図	土 師 器 実 測	78
第 19 図	須恵器・施釉陶器実測	79
第 20 図	石 器 実 測	80

第1章 遺跡の環境

第1節 自然環境

今井こぶし畑遺跡のある今井地区は、松本市の南西、奈良井川と額川のつくる台地上に位置しているが、特に額川が地区の台地を縦断しているところから、この川の営力を受けることが大きい。額川は地区の南西鉢盛山（東筑摩郡朝日村・山形村の境）と烏帽子岳（朝日村）を水源として流れ下る川で、朝日・山形両村の山間を急流で下り、今井地区の平地にはいってからその流れはゆるやかとなり、北に傾斜する扇状地をつくる。従ってこの地区には湧水が—か所もなく、額川の上流から用水をあげ、古代以後の郷村を拓いている。表土にはロームの被覆がほとんどなく、田・畑とも礫土に覆われている。（東筑摩郡・松本市・塩尻市誌第一巻 自然）すべて沖積層で、洪積層の部分はない。

遺跡地帯は下今井西耕地の部落に接し、額川の本流からは僅か100m離れているに過ぎないが、遺跡時代はこの縁辺を支流が流れていた形跡がある。

位置は總体的には松本平の西南部にあるが、その標高は680m、眺望は東方に筑摩山脈の鉢伏山（1928.5m）や高ボッチ山（1,664m）が望まれ、西方には山形・波田の洪積台地をとおり、日本北アルプスの連峰を見、北は遠く白馬岳（2,933m）・聖山（1,447.5m）を、南は塩尻峠を経て仙丈が岳（3,033m）を眺望し、高原的な風光は四季を通じてよい。

気象は年間を通じ松本地方での平均をとるが、気温は平均10度、最高気温20度、最低気温は-20度、通算40度の温度差がある。年間降水・積雪量の平均は1,600mm台で、松本市街中心部の1,300mm台に対しては多いが、全体的にみればそれ程ではない。結局古代人の生活には快適な高原台地で、生活資源の水を川に求めるのほか、その他の食糧、生活資源の採集にも好条件をもっていたようである。そのことは別項に記す、原始・古代遺跡の周辺分布によっても知ることができる。

第2節 歴史考古学的環境

原始・古代の自然相を現在の自然相で律することは無理なことであるが、この上に展開された原始時代からの人類文化の様相を推量することはなお不可能に近い。しかし今次調査の遺跡が、突然あったものではないので、できるだけ詳しく（所在地だけ）別図にこれを示したい。

今井を中心とする周辺には、先土器時代のものとしては今井の岩垂厚（尖頭器・有舌尖頭器）・今井東耕地の合戦場（尖頭器）・今井古池原の西原（尖頭器・ナイブ）などがあり、洗馬（塩尻市洗馬）の芦の田（尖頭器＝東筑摩郡・松本市・塩尻市誌調査）、また山形村（東筑摩郡）内出土の大形打製石斧に似ており、当然同期の遺跡のあったことを示している。

縄文時代にはいつて早期の遺跡及び同期遺跡物の出土地は現在のところこぶし畑遺跡のみで、早期土器の出土地を聞かない。しかし前期のものとしては洗馬の山の神遺跡に住居址5件、前期後半の土器・石器などを発見している。また、朝日村の古見の曾倉沢遺跡、熊久保遺跡からも同期の土器を出し、山形村の唐沢遺跡（波田との村境）からも前期後半の住居址、多数の土器石器の出土があった。また麻神遺跡からは、縄文中期土器に混在し発見されている。

以上は今井周辺の縄文前期以前の遺跡についてであるが、今井地区の遺跡についてみると、まず今井の北部北耕地の耕地中から縄文中期の石斧、東耕地の東丘段地から同期の打製石斧・石鏃などを出し、こぶし畑西の諏訪神社の近くから石皿の出土があった。

また遺跡の南方では今井中沢の大槻氏宅地から縄文中期の土石器・土師器・須恵器を出し、中村・堂村・上新田の宅地や畑地等からも縄文中期の土石器を出し、縄文期遺跡の分布が割合に広く分布している。しかし学術的な調査は1回もなくすべて偶然な発見によるものであった。

しかし昭和33年度におけるこぶし畑の客土に際して発見された、中期遺構の破壊と土師須恵器遺物の出土に際しては、幸地主榎井式司氏の配慮や、客土の作業に従事した村民中沢光也氏の努力により、出土の概要が記録されており、のち遺物を保存していた榎井貞男氏の今井小学校に対しての寄贈があり、この地域に縄文中期～土師時代の遺跡があることが明確にされ県・市の埋蔵文化財の台帳にも明示されるに至った。鍋川左岸の古見・野口の部落も、湧水・流水の遠い地帯ではあったが、縄文中期を中心とする石斧・石鏃の発見があった。とくに古池の登り口である弥生坂の改修の際無文土器の発見があり、そのため弥生坂と名づけたというが、その土器が現存しないので土師器か弥生式土器かは不明である。中沢橋の上にも時期不明の石造遺構があることは筆者及び山本大六氏の調査によって判っている。また野口の北方段丘が鍋川下面の平地と合体する直前の地帯の耕地からは、先年弥生式土器が榎井武十郎氏らにより発見されているなど、思いのほか古代遺跡の分布が多い。このような環境の中に本遺跡が営まれ、これが長年月にわたって引継がれ複合遺跡として今に至ったものである。

（原 嘉慶）

第3節 こぶし畑遺跡の地質（予察）

松本盆地の内部およびその周縁に分布する第4紀層に関する最近の研究は、松本盆地団体研究グループによって行なわれており（1972年、地質学論集、第7号、297-304ページ）、ローム層による段丘区分がほぼ確立された。

それによれば、ウルム氷期の段丘、ことに波田・森口段丘は、盆地中央部において沖積面下に没しているが、このような事例は、海岸に接する地域において、これらの段丘に対比される立川・青柳段丘およびそれらに相当する段丘についても、知られている。

もっとも、海岸平野におけるこのような事象は、ウルム最盛期における海面低下時に形成された

段丘が、その後（沖積世）の海面上昇によって、海岸線に近い部分が沖積層におおわれるに至ったと解釈されているが、海水面変動の影響を直接に蒙らない内陸盆地においても、松本盆地のように、盆地中央部の沈降によって、似たような事象がみられる、という事実が、最近の研究で明らかになってきた。

こぶし畑遺跡も、本来は、波田・森口面の延長上に位置するが、それらの段丘面が沖積層におおわれるに至る場所にあっている。

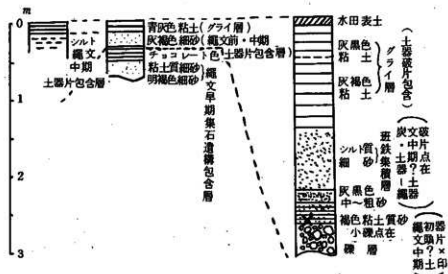
すなわち、それらの段丘面は、盆地中央部へ向って傾きながら、沖積世になってしだいに埋積されたが、こぶし畑附近は、鏡川の氾濫堆積物がこれらの段丘面を扇状地状におおっている、その扇頂部に位置する（こぶし畑附近を扇頂部として、松本空港附近へ末ひろがりになった扇状地形がみられる）。

こぶし畑遺跡附近は、現在は、平坦な水田面となっているが、地質断面（図参照）とその中に含まれる遺物の新旧から判断して、縄文早期～中期にかけて、しばしば鏡川が氾濫し、凹所を埋めるような堆積をおこないながら、しだいに扇状地形をつくったと思われる。

測量を行っていないので、正確なことはいえないが、地質断面図から、つぎのような堆積状況を推定することができる。

集石遺構は、縄文早期の氾濫堆積物からなる塚状堤の高所にあつたものと思われ、早～前期に、この遺構も氾濫（洪水）のために砂層に埋没したが、前・中期には、周囲の低い区域に氾濫堆積物が厚

(西) 集石遺構西壁面 集石遺構北東方 (東)



第2図 遺跡地帯の地質断面

く堆積したのに対して、砂に埋れた集石遺構およびその周縁部の高まりの表面は風化をうけ、ときに洪水の際に洗われて細粒物質がその上に薄く堆積したものであろう。これらの精細については、今後の精査に待たなければならない。

後記

昭和48年12月24日午後、日本で最古の集石遺構といわれるこぶし畑遺跡を、松本盆地団体研究グループのメンバーとともに見学する機会を与えられた、小松慶ならびに関係の皆様にご留意を致します。地質に関する知見は、半日の見学だったために、予察の域を出なかったことをお断わりします。

第2章 遺構の状態と調査経過

第1節 調査日誌

11月28日(水)晴 午前8時30分集合、調査委員・補助員全員参加、予定地区にグリッド設定、小松調査主任指導、Dトレンチ1区より18区まで発掘開始。Dトレンチ第1区より4区の間で年代・規模不明の集石遺構を発見。

遺跡地帯東部・中部より縄文中期初頭土器片発見、西部からは弥生時代の条痕文土器片発見、その他2区地下25cmより打製石斧1個発見。遺跡周辺地区に対してブルドーザー使用表土除去、トレンチ10本を入れる。遺構発見なく異常なし、よって調査を予定地にしぼる。

11月29日(木)晴 午前8時30分作業開始。Dトレンチ第1～第4区の集石遺構の調査に重点を置く。土堅く、作業困難。なおこの時、集石部の層より縄文早期の押型山形文土器片が発見された。発見土層は、黒褐色粘土層と石積の間からである。Iトレンチの調査も開始、表層に近い耕土中から須恵器片発見、第2層褐色土層中より、打製石斧・縄文中期初頭土器片の発見があった。また、Iトレンチから弥生前器土器・縄文中期初頭土器片の出土があったが、縄文前期(諸磯C)の土器片も少量発見、その他打製石斧・黒曜石製石鏃等出土があった。

11月30日(金)晴 作業は前日の継続、Oトレンチの第3～第5地区、Eトレンチの第17・18、Fトレンチの第16～第18地区、Gトレンチの第16・17地区、Hトレンチの第15～17地区の調査を実施。集石部の除去、Iトレンチ第2地区北壁に接し落込みを発見、遺物包含層は地表下50cm余で下層の横石層に達するが、その中間に縄文中期初頭土器の1個体分が発見され、他に黒曜石製のフリタ2個も発見された。

また遺跡地帯西部の弥生遺構の追究をしたが、住居址か否かの確認はされなかった。なおこの地区からは黒曜石製の打製石鏃が発見された。

12月1日(土)晴 作業は前日に引続き行なう。Dトレンチ第1～第8区の調査をはじめ。各区に若干の遺構遺物をみたが、特記することはない。集石部の範囲は現在のところなお不明、集石間

の除土清掃を進める。

12月2日(日)曇 作業は前日に引続く、特にショベルカーの出動を得て、ハ・チ・ニト各トレンチ上の除土をする。ホトレンチ第13区の地下60cmに径60cm余の小集石部発見、弥生土器が出る。ヘトレンチ第13区内に落込みと弥生土器片発見、Iトレンチ第2・3区に縄文中期の土器の出土と、不整形集石部を認める。

12月3日(月)雨～曇 天候不順なれど作業実施、ロトレンチの土師住居址を確認、址内の除土をはじめ。東西に2個並んでいるが、左は、ほぼ完全、東壁に粘土製の甕をもつ、右は不完全、壁・床をショベルカーにより破損、トレンチ、チトレンチ間の第13～第14区から、上層集石部・須恵器片・土師器片・弥生土器等の発見があった。Gトレンチ第2区地下47cmの褐色土層中に集石があり、押型山形文土器片を発見した。またFトレンチ第2区の黒褐色粘土層中に立石を伴う環状組石を発見、この組石の下層に数石部を確認した(凸型環状組石)。立石は基部を南東方向に、突端部を北西方向に、環状組石上に倒れた形であった。

Fトレンチ第2区、Gトレンチ第2区にわたる集石遺構は、ほぼ全面に出現し、その集石部の中にいくつかの組石部を発見したが、その中に凸状・凹状の環状組石のあるのが本址の特長とみられた。本日の出土遺物は、Hトレンチ第16区の石匙、Gトレンチ第2区の縄文早期の押型山形文土器・須恵器の坏などである。

12月4日(火)曇 作業前日に続く、土師住居址の右を発掘。また集積遺構の全面除土清掃に努力、午後集石部の実測開始。本日の出土遺物、集石部より縄文早期尖底部・同山形文土器片・石鏃(チャート)など。

12月5日(水)晴 作業前日に続く、積石部の全面除土と清掃作業、本日該地区より遺物の検出なし、集石部の範囲はつかめなかった。午後、全面的実測。西部の弥生遺構では、土手を掘り割り地層をみる。信州大学医学部西沢氏ら応援。現場を各新聞社記者見学、成果の発表をする。

12月6日(木)曇 作業前日に続く、集石部の補充清掃、土器取上げ、遺構の残部実測、写真撮影、本日の出土遺物、集積部より早期山形文土器片が出る。集積部上層に浮上配石、中期初取住居址床面があり、集積層は最下層であることが確認された。

12月7日(金)曇 作業前日に続く、小間降り寒気強く、集石部の除土に苦しみ、土師住居址の北の集石址実測、その他トレンチ、チトレンチの各第14・14区内に分布する配石を実測する。

12月8日(土)晴 作業前日に続く、集石遺構の範囲を知るため、該地区の拡張発掘。ショベルカー出動除土の補助作業をする。南・東・北の各部、遺跡西部の弥生遺跡の北壁・西壁の実測をする。主な出土遺物は、Gトレンチ第1区の西寄りの集石遺構中から、縄文早期山形文土器片10片出土。Hトレンチ第3区の第2層中から完形の石皿1個発見。

12月9日(日)雪のち晴 集石部の中央断面実測、遺跡西部の弥生住居址同断、また東部の土師

住居址左の東壁の竈を切断調査、焼土厚く、土師器片若干を出す。予定の第1次調査は12月5日で終る予定であったが、遺跡の重要性に鑑み、本日まで継続、各調査委員には格段の協力を願った。

12月10日(月)晴 原調査団長は大和調査会長に調査概要報告を提出、かつ本遺跡の重要性を説明した。

12月11日(火)晴 要請により東京国学院大学客員教授大場登雄博士の視察と指導があった。

12月12日(水)晴 長野県教育委員会文化課係長金井汲次氏一行の現場視察があった。

12月17日(月) 文化庁記念物課安部義平技官の現場視察があり、遺跡の重要性から再調査の意向を決めた。(以後21日まで調査中断)

12月21日(金)晴 松本市教育委員会の主催により国費・県費の補助を受け、25日まで継続調査をすることとなり、調査会・調査団は前回のものをもって実施(但し、県教委文化課指導主事桐原健・山田瑞穂氏らの協力を求めた)。午前中よりバックホーン動員、集石址周辺の除土実施。弥生地区の拡張部発掘。出土遺物、集石部より縄文早期押型山形文土器片・縄文中期初頭土器片・同期石皿・石匙、弥生土器その他を発見。

12月22日(土)曇 作業昨日の継続、集石遺構の組石付近の除土、現状組石(凸・凹)の内部の調査をする。凹・凸の下部になお集石のあることを確認、Dトレンチ14・15区内に小配石址が発見され土壌濃かど判断された。同じくDトレンチ第10区の小配石址からも縄文中期初頭の土器片が発見された。弥生地区ではEトレンチ第18、Fトレンチ第17区を掘り、午後はGトレンチの第16区に及ぶ。ここで径5.5cm、深さ6.8cmの柱穴が発見され、中から黒曜石の有柄石鏃、弥生時代の朱痕文土器片が発見された。熊谷康治氏作業応援。

12月23日(日)曇 作業昨日の継続、集石部の調査に全力をあげる。Gトレンチ第4区の集石上層から縄文中期初頭の土器片8個出土。Gトレンチ拡張部第1区からはピット発見、遺物には中期初頭土器片、及び打製石斧・木炭末・灰層等の発見があった。この日山越正義氏・熊谷康治氏の調査応援があった。

12月24日(月)曇 小雪降る。作業続行。集石部は、Hトレンチの第5区、Iトレンチの第5区を拡張し発掘。Iトレンチ第4区の第2層(黄褐色土層)中より打製石斧1個、縄文中期初頭土器片10個発見。午前中は降雪の中で作業、午後弥生遺跡地区で、柱穴発見。なお床面の炉址も発見した。また、この弥生住居址は他の住居址に切られていたが、切ったのは、土師住居址であった。午後信州大学地学教室の郷原保真助教授・西沢寿見氏らの地質調査応援があり、主として弥生地区を精査した。

集石部からはIトレンチ第4区の第2層中から縄文中期初頭の土器片、打製石斧を発見した。なお集石部の中にあるマウンド状横石部の全容を調査するため、周辺の掘下げをしたが、その結果は高さ1m、裾張り3m余であった。また、Hトレンチ第5区(マウンド状横石の北西)南側のセクショ

ンは下記のとおりであった。（大久保調査委員）

第0層	昭和33年客土の際除去	約1m
第1層	表土（耕土＝黒土層）	18cm
第2層	黄褐色土層	18～21cm
第3層	黒褐色粘土層	15～18cm
第4層	淡褐色土層（砂質）	13～18cm

以下集石の基部

12月25日（火）晴 発掘調査最終日、積石部の全体清掃を計画したが、今朝の松本地方の気象は零下13°～15°となり、石間の粘土の凍結をみ、午前中作業不能。そのため弥生遺跡の除土、のち集石部の調査実施。Gトレンチ第1区の第2マウンド清掃中、縄文早期の押型山形文土器片採集。弥生遺跡を切る北側の落ちこみは、出土の灰軸陶器により、土師時代の住居址と確認された。址中に砂質の土砂が堆積し、鍋川の小分流の影響を思わせる。柱穴址を2個発見した。午前中長野県文化財専門委員長一志茂樹博士ら一行の視察があった。

12月26日（水）晴 遺構の実測と残存整理をする。積石部水洗中線刻の石発見。測量用写真積石部にて4枚撮影。本日は山田瑞穂氏・一条隆好氏ら実測作業に応援あり。

昭和49年1月10日（木）晴 本日より埋立て作業、集石部にてビニールをかぶせ、15㎡の砂をもって処理、明日中全地域の埋立てを終る。

（原 嘉 藤）

第2節 集石遺構を含む各グリットの所見

ここで述べる発掘箇所は、去る昭和33年6月、地主により、客土用の床下げが行なわれ、上層土約1mが除去されていた所である。従って今回の発掘は、遺跡破壊後の発掘ということで、当初あまり期待はされていなかった。

グリットは、この床下げされた田の南東部を基点と定め、A・gを1区とし、以北に向けて2m間隔に区切りZ・gまで設定、以西に向けては、2m間隔に区切り、20区まで設定した。発掘調査は、都合に依り、当初D・gより開始された。

D・gの発掘所見では、1～8区に亘る層序が、各区共、第1層黒土（耕土）18～20cmの堆積を示し、以下第2層として、堅緻な黒褐色土層に直接移行し、第1層とは明瞭に区分されていた。遺構としては最も注目浴びた集石部は、1～4区の第2層中に亘って全面に出現した。はじめは雑然たる感じで、一見河原の転石を想像せしめた。然し集石を埋める第2層は、純粋なきめ細い土質で、集石の間隙には砂礫等の夾雑物を全く認めず、床下げ時に穴を掘って土砂を排棄し、埋めたものでないことは、はっきりしており、この集石を覆う土層は全く攪乱されていなかった。依って意圖的

な人工による遺構であることを確認する。これらの集石遺構の全貌を出すには、土層が堅いため、非常に困難であったが、2区、4区等から遺構の位置づけともなる、縄文早期の山形文土器片の検出をみた。その他遺構として、4区の2層中にくい込む上面径60×90cm、-32cmの落ち込みが認められ、内部精査の結果、微量の木炭化物と、個体の相違する縄文中期初瓠土器片、打製石斧1の混在するを認めた。又、8区にも上面径43×47cm、2層中への落ち込み17cmを認めたが、遺物は縄文中期初瓠土器細片微量と、黒曜石フレイク2の検出にとどまる。他の遺物としては、いずれも第2層の上部面に、1区で数片、3区で1片の縄文中期初瓠土器片、3区で須恵器片1、10区で打製石斧1の検出をみた。

D・gに出現した集石遺構が整然さを欠き、明確な輪郭をもたず、性格決定が困難であるので、隣接区に亘り、広範に及ぶI・gの発掘を試みた。

I・gの1~4区に亘る北壁の層序は、D・gとは様相を異にし(第 四参照)、第1層黒土(耕土)34~68cm、第2層黄褐色土が、1区で28cm、2区で20cm、3区で14cmから消滅し、4区の西寄り再び堆積を示しており、第3層が集石遺構を包む黒褐色土となっている。

発掘過程においてこのI・gには、第2層に落ち込むピット状遺構が都合3箇所確認された。D・g・4区に検出された、ピット状遺構と様相をほぼ同じくするものである。それらを記述すると、その1は、3区における上面径30×30cm、-15cmの規模であり、ピット内より打製石斧2、縄文中期初瓠土器片微量が出土した。その2は、2区におけるもので、上面径85×85cm、-23~32cmで底部面が不整であり、ピット内より凹石1、黒曜石フレイク2、底部面より2個体分とみられる、ややまとまった縄文中期初瓠土器片を検出した。このピットの底部は、その下層に続く集石遺構の上面近くまで達していた。その3は、2~3区に亘るもので、上面径47×55cm、-27cmであった。ピット内には13×25×36cmの、比較的大きな平たい石を中心に置き、鶏卵大の石数個を寄せ集め、その上下面やまわりに、1個体分とみられる縄文中期初瓠土器片が、黒曜石フレイク3、木炭粉末微量と共に混在した。これらピット状遺構による出土遺物の他、1区の2層中より縄文中期初瓠土器片若干、2区の3層中より縄文早期山形文土器片1を得た。集石遺構は、I・g各区の第3層中からも不整然たる状態を示し乍ら全面に出現し、周辺に尚分布のつながりをもつ遺構であることを推測させた。

D・I各グリットにはさまれた中間地帯が未発掘で、この両グリットの関連が不明であるため、E~H各グリット2区を発掘することに依り、その結びつきを追求する。E~H・g各2区西壁の南北線の層序(第 四参照)は、第1層黒土18~20cmを示し、第2層黄褐色土は、H・g、2区で13~20cm、G・g、2区で2~12cmとその堆積に大きな変化を示し、F・g、2区では2~5cmとなって、E・gにかけて徐々に消滅する。第3層は黒褐色土に移行し、8~13cm程度の掘下げに依って、全面に集石遺構の露出を見知し、D・I・gの集石と相違するものであることを確認した。

遺構として、2層より1部3層にくだむビット状遺構を、H・g、2区に検出する。規模は上面径65×75cm、-23cmであり、その底部は下層に続く集石直上に及んでいた。遺構内からは、縄文中期初頭土器片と木炭粉末が、こぼし大から人頭大の石数個と共に混在した。3層中における集石遺構の中には、集石上に更に意識的な構築がみせられる。注目すべき環状組石が、F・G・gに2箇所発見される。いずれも非常に良好な状態で、原型を保ちながら遺存していた。又、遺物としては、集石に密着しあるいは集石の間隙を埋める土の合間から、縄文早期山形文土器片の散在があり、他にE・g、2区の3層中より石礫1を検出した。

以上より本遺跡における該所の第1次調査は終了したが、後、第2次調査のはこびとなり、集石遺構・弥生遺構等の追求が続行される。

第2次調査は、E~H・g、各2区に東接する、E~H・g、各1区及び拡張1区と、これに西接する各3・4区。D・g、拡張1区。I・g、拡張1~3区。J・g、1~4区及び拡張1~3区。H・I・gの各5区等が発掘された。この内、かつて田の床下げが行なわれなかったI・g拡張2・3区の北壁層序をみると、第1層黒土(耕土)約70cm平均、第2層黄褐色土166~170cm、第3層黒褐色土22~26cmで集積遺構に達した。この層序が本来の堆積土を最もよく示しているものと思われるが、第2層の堆積が特に厚いものであることに注意を要す。又、H・g、5区の南側層序は、第1層黒土約18cm、第2層黄褐色土18~21cm、第3層黒褐色土15~18cm、第4層砂質淡褐色土13~18cmを示し、地層の形成に複雑さが認められた。いずれにしても、各ドリット共給して第1層黒土、第2層黄褐色が僅かに残され、第3層黒褐色土となっていた。

調査結果によれば、遺構として、第2層より第3層に落ち込む、ビット状遺構が2箇所認められ精査される。その1は、G・g1区の上面径65×65cm、-30cmで、その底部は更に下層に現われる集石に浮上すること5cmを示していた。遺構内より、縄文中期初頭土器片が、黒曜石フレイク・木炭粉末・微量の焼灰・人頭大の河原石3個と共に混在した。その2は、D・g拡張1区の上面径65×65cm、-25cmの規模をもち、内部から、個体の相違する縄文中期初頭土器片若干・打製石斧1・石礫1・細かな黒曜石フレイク3等が、人頭大の河原石2個・木炭粉末・微量の焼灰と共に混在した。又、I・g拡張1区の2層中、H・J・g各5区の2層中より、縄文中期初頭土器片若干と打製石斧1を検出した。以上の如く、2層乃至3層に落ち込むビット状遺構は、都合8例を数えて異彩を放つ、然もそのいずれもが内包された様相をほぼ同じくし、時期的には、縄文中期初頭文化に存属するべきものであった。惜しむらくは、田の床上げ以前に所在したであろう第2層内に、1時期営まれたと思われる該文化の、遺構・遺物が消滅し去って、その結びつきが不明であることである。幸か不幸か、上記ビット状遺構の残影のみがここに検出された感じである。又、完形土器こそ出土しなかったが、これら遺構の意味するものに対しては、その内に秘められた、事物に対する何らかの心づかいが感ぜられるところである。一方、第3層中の遺構としては、発掘箇所全面に及ぶ集石を確認す

る。又、特徴ある環状組石として、新たに3箇所認め、積石部やサークルを示すと思われるものも出現する。更にF・g 3区の集石内には、線刻画の上面に施された石の発見があり、G・g 1・2区を中心とする約10m範囲の集石間、或いは集石に密着して、縄文早期山形文土器片の分布するをみる。

集石遺構

1次・2次調査により検出された集石遺構は、東西約14m、南北約14mの広範に亘るものであった。然も調査期間内に、遺構の全容を明白にすることができず、未発掘となった隣接区域にも、尚分布する遺構であることが認められた。従って本報告も、かかる条件下における報告とならざるを得なく、その点、心残りを覚えるものである。集石遺構は前項でも述べた如く、黒褐色土層中に堅く埋没し、その1部はH・g 5区の如く、砂質淡褐色土層中にも及んでいた。調査作業に当っては、黒褐色土層が石を削る様な堅さであったこと、加えて零下10度をこえる寒気、或いは降雪に折々悩まされ、難炭を極めて悪条件下の発掘であった。依って発掘箇所の全面に亘る集石遺構を認め乍ら、実測図(第5図参照)の面では、清掃作業ができなかった為に、部分的に集録できず空白部となった所もあった。然し鋭意精査の結果、遺物として前述の如く、同一層内の集石間に石縁1を含む数10片の縄文早期山形文土器片の検出があり、又、構造の面では集石遺構の各所に、石と石との接着部に薄く粘土を用い、固着した跡がみられ、遺構上に前記のような環状組石等を検出することができた。然し明確に把握され得る組石等の他は、集石が極めて複雑多岐に絡みあい、明確に判別できないものも多くあった。見方によっては様々に理解され得る複雑な集石集団の中において、ここでは明確に整然とした輪廓をもつ、組石遺構のみを挙げ、その概要を詳述したい。

第1環状組石(図版4)

環状組石として、明確に最初に発見されたもので、本集石遺構内においては、その存在意義の比重が極めて大なるものである。活用時には、おそらく立石を中心にもつであろうと推測され、F・g 2区の集石上に更に意識的な構築が成されていた。規模は100×100cmの円形で、凸状に盛りあげられ、環状の縁の高さは10~22cmであった。この組石の上面には、立石に使用されたとみられる5×18×56cmの細長い板状硬砂岩質の河原石が、基部を南東方向に低くおき、その尖端部を北西方向にやや高くおいて、倒れた形を示していた。組石の構築は、南側に20×23×25cm、北側に23×25×35cmの河原石を配し、これを結ぶ環状の縁辺には、5×8~10×20cm程度の河原石を寄せ集め、これらの石が崩れない様、粘土と米粒大の砂礫を賦合した材料を使用し、石と石との間隙を埋めると共に、堅く縁辺を固着させてあった。検出過程では、この組石の上面及び縁辺等に、木炭粉末の存在を若干認めた。又、組石の上面から-25cmの内部精査の結果では、8×10cm程度の石が縦に詰め込まれ、下部の集石(敷石)に通じており、附属遺構、遺物等の検出は認められなかった。

第2環状組石(図版4)

F・G・gの各2区にまたがり検出された。第1環状組石が凸状であるのに対して、凹状を呈する。第1環状組石の縁辺から北側へ、僅か55cmの至近距離に所在し、規模は南北方向83cm、東西方向75cmではほぼ円形を示し、落ち込みの深さは20~24cmであった。整った原型をそのままに遺存し、壁は大小の河原石を環状に組合せ、又、底部面には数個の河原石の平面を上面にならべ、それぞれの間隙には、粘土と砂礫を混合した材料で厚く埋め込み、崩壊防止の壁間固着と、底部の仕上げが念入りになされて堅緻を極めていた。落ち込みの内部からは、遺物の検出は認められず、底部面上約7cmの土層間に、少量の木炭粉末が焼灰や黒褐色土と共に、混在堆積していた。又、底部面を1部削り、下部調査をした結果では、20~25cmの礫層があり、更に河原石(數石)に通じていた。

第3環状組石(図版5)

G・g1区に検出され、環状組石が2重となる唯一の遺構である。内周の組石は凹状を呈し、規模は東西65×南北68cmで落ち込みは約14cmを示す。これをとりまく外周の組石は、東西155×南北170cmであった。内周の組石は東側に上面径33×35cm、西側に20×30cmのやや大きな石を配し、南側に15×30cm、北側に13×20cmの石を置き、この4点を結んで10×15cm大の石が、環状に組合わされて構成されていた。然し組石による壁は、粘土等による固着が充分でないためか、その輪廓は第2環状組石に比し、やや崩れた感じを受ける。底部面は10×15cm程度の4個の石が上面を平にのぞかせ、他は砂礫と粘土の混合物で充填して、堅く平らに仕上げられていた。落ち込みの内部からは、覆土に混じて木炭粉末が若干認められたが、出土遺物はなかった。

第4環状組石(図版6)

G・g 拡張1区に検出され、凹状を呈し、第3環状組石の外周線東側に隣接して所在する。規模は東西90×南北94cm、落ち込みは約15cmであった。環状の縁辺には10×15~20×30cm程度の石を組合せ輪廓をとるが、所々石の配置されない部分もみられる。底部面は粘土と砂礫の混合物で、平面に堅く仕上げられており、落ち込みの上部面には、木炭化物の粉末と無文の土器細片少量の出土がみられた。この遺構の下部調査の結果では、落ち込みの底より約30cmが礫層の堆積で、以下10×20cm大の河原石層に通じていて、附随する遺構・遺物等の検出は認められなかった。

第5環状組石(図版7)

H・I・g各3区にまたがり発見された。凸状で第1環状組石の如く、集石遺構の上に構築されていた。規模は南北88×東西90cmで、集石上の高さは12~20cmであった。構造は10×10~24×38cm程度の河原石を密に組合せ、その間隙を粘土で埋めて固着させており、極めて良好な遺存を示し、安定した環状組石の輪廓も、そのはしの線も整って見事であった。上面に立石は伴わなかったが、縁辺に接して13×48cmや20×38cmの、立石に格好な形を示すものが所在し、構築の当初にはあったものであろうと推測される。又、上面は黒褐色の包含層に覆われており、組石の内部の掘り下げ調査の結果では、出土遺物はなく、深皿状を示す窪みの最深部は-18~22cmを記録し、

以下、緻密に組まれた集石に続いていた。

第6環状組石

第5環状組石の縁辺から南へ75cmの位置に所在し、規模は南北70×東西85cmのやや楕円を呈する。第1～5環状組石の如く、壘型の特徴を示すものでなく、集石内に平面的な環状がうかがえるものである。遺構内からは出土遺物等認められなかった。

第7～9環状組石

第7～9環状組石は、第1環状組石の南西部に接する如く所在し、平面的で相互引き合いをもつ遺構であり、複雑を極める一群であった。第7環状組石は、95×95cm円形の規模であり、10×25～27×43cm程度の河原石が組込まれ、第8環状組石は、この三者の中央部を占め、規模は110×110cm円形で他の二者よりやや大きい。縁辺には10×18～18×33cm程度の河原石が敷かれている。第9環状組石は、前二者より小形の河原石が多用され、その規模は100×100cm円形を示す。これら三者の遺構は、第6環状組石の如く独立することなく、意識的な目的の下に、結びリング状に相互の引合いをもたせたものかも知れず、環状組石のひとつの在り方として注意される。尚、第8環状組石内より、尖底土器の底部1と石畿1が検出された。

第10・11環状組石

やはり相互引合いをもつ環状組石と推測されるので、ここで一括取扱った。第10・11環状組石は第9環状組石の南側に隣接して発見され、第10環状組石が約118×118cm円形の規模を示し、第11環状組石は約300×300cmと、かなり大きな環状を示すものと思われる。後者は北西部の縁辺に大きな石を配置し、南東部にかけては、それがみられず輪廓に明瞭度を欠く。内側には大小の河原石が敷かれ、遺構内より縄文早期山形文土器片が発見された。

第1積石部遺構

D・g 拡張1区に所在し、積石は約90cm円形、高さ約25cmを示す小形遺構である。鶏卵大から人頭大の河原石の累積が認められ、その中心部上面には、25×30cmの細長い河原石が横たわっていた。石の間隙は、包含層と同じ黒褐色土で埋合わされており、遺構内よりの出土遺物はなかった。この遺構は明瞭な輪廓を示すものでなく、尚、周辺地帯清掃の必要を認めるものである。

第2積石部遺構

H・g 1、2区にその主体をおき、やはり明瞭な輪廓を示さぬ積石遺構ながら、推測される規模は、約250cm円形、高さ約30cmであった。土石混合の感が強く、遺構の上部には、22×47cmの細長い河原石などが存在する。又、積石部の土の除去作業中、縄文早期山形文土器片の散在をみたが、本遺構も尚、精査を必要とするものであり、内部構造等も不明であった。

第3積石部遺構（マウンド状）

H・I・gの各4、5区に出現し、完掘はできなかった。従ってその全容は正確に掴み難い。然し

出現した範囲での規模は、約300cm円形と推定さる、かなり方形を示す遺構である。I・g4区に積石の頂点を置き、東側へは緩やかな傾斜を示しながら、これに続く集石に通なるが、北側のJ・g4区にかけては、急な下降勾配を示し、頂点より北200cmの地点では、その高低差100cmを記録した。積石は累々たる河原石で積みあげられており、頂点周辺は、前述のH・g5区南側層序による、第3層黒褐色土に包まれていたが、下部面は第4層の砂質淡褐色土に覆われていた。又、積石上部面には、25×55cmの太い石棒状河原石も所在し注意を引く。遺構内よりの出土遺物は皆無であった。尚、本遺構の全容を究めるためには、隣接区の拡張調査が望まれるところである。

線刻画石(図版17)

F・g3区の集石内に発見され、第1・2環状組石の西縁を結ぶ直線上に、直角に交わる西方170cmに所在した。この両組石遺構と線刻画石は、二等辺三角形で結ばれる位置をしめている。この石は24×32×42cmの、かなり重量感をもつ硬砂岩質河原石であり、水洗いして精査した結果では、丸みをもつ石の上面に、16×32cmの範囲に亘り、小刻みに叩きながら線刻を施していた。長さ6~13cmを示す曲線状の弧を主体にして、3~3.5cmの直短線、4×4cmの円形等が組合されて描出される。線刻の1単位となる刻みの大きさは、0.5×0.6cm、陰刻の深さ約0.3cm平均を示し、楕円状を呈し、この刻みを密着連続させることによって、線辺に刻目を残す線を形成させている。いわゆる引振線とか、磨り込んだ線とは趣を異にするものである。刻みに要した用具類等は不明であるが、しっかりと刻み込まれている。尚、この石の周囲には、30×35~25×60cm程度の大きな河原石が4個配置され注意される。線刻画の意味するもの、性格等については、別項で詳述されるので、ここでは省略する。

以上、集石遺構全般に亘る、特徴ある環状組石・積石等について語ってきたが、なかには方形を示すと思われる遺構も、明確ではないが所在した。補足していえることは、これらの遺構が、いずれも硬砂岩質の河原石を使い、攪乱されない黒褐色土の、堅く張られた同一層内の検出であったこと、環状組石等は、直径100cm内外の小形な規模を示すものが多いこと。下部に落ち込みその他の附属遺構をもたぬこと。それぞれの遺構に木炭化物の粉末が伴い、火に関係深い行事が、なされたであろうことが考えられるが、組石が殆んど焼けていない事実から、常時焚かれたものではないことも明瞭である。

(大久保知巳)

第3節 第4号弥生住居址(第6図)

本址は調査地域の西端より発見された。D18とI17附近に弥生土器の出土が多いので、この区間の調査を進めたが、土器片は多いが遺構がつかめず、HとIの14と15の境附近でP1・P2の住

穴が発見され、北側に調査を伸ばし、Jの14~17を調査した。弥生住居址の遺構は黄褐色土直上で、その上には黒褐色土があり、側壁の存在は確認できなかった。住居址の遺構としては、P1・P2の柱穴2箇所と、炉址と考えられる焼土が、100cm×60cmに発見された。焼土面の上面を床面とした場合、本址の床面は黄褐色土上、5cm~10cm上の黒褐色土の中にあることになる。Jに柱穴を求めたが第6図でみるように、土師期の住居址に斜に切られ、破壊されているらしく、発見できなかった。したがって、本址の範囲は、はっきりしない。柱穴P1・P2の間隔は295cmあり、P1は径55cm、深さ68cmで、途中でくびれ、くびれた少し上の北側より黒曜石製の石鏃を1点検出した。くびれた部分からはその径も20cm×25cmとなり、穴の底部近くからは条痕文の土器の小破片2片を出している。P2は径35cm×25cmあり、穴はP1側に斜に掘られており、P1もP2側にやや斜となっていて、上部構造との関係があるように思える。松本市内田の横山城遺跡の場合は、円形ないし楕円形が考えられているが、出土遺物も本址のものと同じであり、本址の形状も同様であろうと推定される。整穴か平地住居かの問題ものころが、今後の調査例に期待したい。

本遺跡の出土品には弥生土器が多く、これに関係した住居址は第1号址のみであるが、ア〜ソ地域では4個の住居址が調査終了後の整地作業により消失し、遺物の出土地点を検討すると、なお5箇所以上の整穴があったことが想定され、この地域に弥生時代の集落のあったことが容易に想像できる。ア〜ソ地域は工事関係者の説明によると、ほぼ現状の地形で造成工事がされるとのことであったが、作業は説明より深く実施され、弥生前期の遺構を多く失ったことは残念であった。

(小松 虔)

第4節 土師時代の住居址

今回の調査において検出された土師時代の住居址は、完形のもの1個および、住居址と推定されるもの2個の計3個にすぎない。

第1号住居址(第7図、図版12)

本址は第2地区のI11を中心に発見されたもので、東西6m・南北5.9mを測る隅丸方形をなし、主軸方向はN-3°-Wである。本址の上層からは弥生・土師・須恵等の小破片が検出されている。壁高は西壁が30cmを示すほかは、三方とも20cm程であり、西壁中央には床面よりやや高い位置に60×20cmの平板な石がすえられており、ここが入口と推定される。床面は水平で、堅緻であり、4箇所の柱穴が3.2×2.9mの長方形をなしてうがたれ、その大きさはP₁は25×35cm、P₂は42×48cm、P₃は65×41cm、P₄は45×40cmで、深さはいずれも20~25cmである。その他には柱穴、貯蔵穴などはない。柱穴と住居址隅を結ぶ位置には、3ヶ所に30cm大の礫がある。入口と対して東壁中央には1.4×1.5m、高さ20cmの竈が築かれ、その中央から巾25cm、長さ1.5mの煙道が真東に設けられていた。竈はくずれていて形をなさず、深さ20cmにわたって鮮かな赤褐色に焼けており、

第18図7・8の土師器が出土したことを考え合せると、粘土と土器片をもって、竈は構築されたのではないと思われる。床面中央には白色をおびた須恵器の壺破片が散らばり、これを本址の中心的な遺物とすると、土師時代中期の半ばと見ることができよう。

第2号住居址(第7図、図版10)

本址は第1号址の東2.5mに主軸方向N-0°-Wで接し、南北4.7mの壁をもつ住居址である。しかし、第1号址と同様に上層からは弥生式土器片の出土をみ、また後述のごとく弥生期の焼土が床面より高い位置から検出されていることなどにより、住居址としての輪郭をつかめずに終った。

西壁は第1号址とほぼ平行に床面より50cmの高さで立ち、北壁も西より2.5m程まで識別されたが、東へ進むに従い落込み上層と判別がつかなくなり確認され得なかった。床面は西壁中央より東2mあたりまでは堅緻なものが存在していたが、東へすすむにつれて不明となり、遺物は浅い位置より弥生式土器片が出土し、西壁より3.5mの地点には直径75cmの円形にちかい厚さ20cmの焼土があり、東壁は検出できなかった。

本址の西壁近くには長さ50cmの平板の石がおかれ、入口を示すものと思われる。遺物は床面直上および西壁にそって2点の坏片が出ており、その他、土師・須恵の小破片が出ている。また南側に径30cmの石、東側にも数ヶの石が検出されたほか、柱穴などはない。ただ本址の北東に1.2×1m、-70cmの大きなピットがあるが、これが本址に付属するものであるかどうかは不明である。

本址は上層の黒色土層中に弥生期の遺物があり(一部土師、須恵器も混在)下層のやや褐色をおびた黒色土層に床面が検出されている。この床面は土師期のものと考えられるが、床面の下層には何の遺物もなく、不明のまま終ったことは残念であり、後日の調査により解明をねがうものである。

第3号住居址(第6図)

本址は弥生第4号住居址を斜に切ってつくられ、南西隅寄りと考えられるところに竈があり、竈内や廻りに木炭の残存があった。遺物は中央弥生住居址寄りの壁近くに灰釉の高台付皿の底部が出土している。本址は洪水により埋没したらしく、住居址内には砂利がたまっていた。本址の上部にある配石は中世の遺構と考えられるが、遺物は発見できなかった。

(神沢昌二郎)

第5節 その他の遺構

(1) 縄文の土壌(第8図)

A DT10(-)30の北西隅に、東西90cm南北82cmの土壌があり、その中には中位の川原石5個(26cm×34cm・45×17 27×27・52×23・30×26)を以て、土壌上面を平に充填してあった。深さは20cmでその中から縄文中期初頭の土器片が3~4片出土した。

B PT10(-)50で土壌が一つ発見されている。長径南北100cm、短径東西60cmの楕円形で

深さは約20cmあり、その上部には、中位大の川原石4個が置かれていた。土壌内より縄文中期初頭土器片1、打石斧銛割半分1、木炭が出土した。

C DT1 6(→)20のETより長径東西60cm、短径南北38cm楕円形の土壌が発見された。深さは約25cmあり、その上部には、穴全体を覆うように大(径30cm)中(径17cm)小(径10cm)など、11個の川原石をもって充填しており、石と石との間から、縄文中期初頭土器片1が出土した。以上3つの土壌は、その規模や伴出物から縄文中期初頭に位置づけられる。大きさからいって成人の墓墳とはし難く、子供の埋葬施設と認められる。

② 弥生の土壌(図版9)

A 第2地区T7(→)25の中央から、長径(南北)68cm、短径(東西)48cmの土壌があり、この土壌は径3~7cm位の川原の小石と、附近の土との混合をもって充填されていたが、この1m位東北の同位層から弥生式土器(甕、復元可能)が発掘されている。

B 第2地区T7~8(→)25のITより長径(南北)73cm、短径(東西)約50cmが、前記の土壌と同位層で発見された。これには径3~7cm位の川原の小石のほか、23cm×17cmの大石が1つと附近の土との混合をもって充填されていた。

この2つの土壌は、全般の発掘の進捗上の都合により詳細なる発掘調査が行なわれなかったが、たまたま第1地区集石部発掘の進捗過程でブルドーザーの除土作業中、B土壌の一部が切断され、その断面から弥生式土器片が発見された。この土壌は深さ約63cmのもので、その上部と同じく小石との混合によって満されていた。以上のことから、この土壌2つは、ともに弥生式時代中期初頭に属する土壌墓であると推定した。

③ 集石址(図版3)

IT11(→)42の北側に寄って、長径(東西)1m80cm、短径(南北)75cmの長楕円形の集石址が発見された。大小様々の川原石をよせ集めてあり、その下に土壌がありそうであったが、全調査の都合上未調査となった。これからは上部から縄文土器が出土しているので、縄文系の土壌墓である可能性が高い。

(倉科明正)

第 3 章 遺 物

第 1 節 縄 文 土 器

本遺跡出土の縄文土器は、縄文中期初頭土器、縄文早期押型文土器に大別分類される。そのいずれもが破片でしめられ、完形を示すものは全く検出されなかった。早期押型文土器片は、すべて、第 3 層黒褐色土層内の集石遺構が出現した D～I グリット、特に G グリットの各 1、2 区を中心とした地区からの出土であって、遺構とは同層、同一時期の遺物である。又、中期初頭土器片は、発掘地点が約 1 m に亘る床下げによって、本来の包含層である第 2 層黄褐色土が、除去されてしまったためか、量的には多くなく、活用される資料も、ピット状遺構から検出されたものが大部分をしめる。他は僅かに残留する黄褐色土からの出土で、第 3 層黒褐色土よりの出土は認められなかった。遺物は、いわゆる梨久保式に対比させるべきものが主体を占めるが、系統を異にすると思われる土器も混在する。以下分類を試みながら記述する。尚、土器番号には一連番号を附した。

第 1 類土器（第 1 2 図 1～4 2）

縄文早期土器片を 1 括し、更に a・b に 2 分類する。

a 類（1～4 1）、共通していえることは、器厚が 0.3～0.4 cm、焼成はよく色調は茶褐色系をとり、胎土に砂粒を含むことである。1・2、6～10 は口縁部破片で、外反の傾向を示し、口唇に沿って横位帯状の山形文が施される。施文帯は約 2.1 cm 巾を示し、内に 4 本の山形線が形成されるが、山形の 1 波長は 0.6～0.7 cm、陽・陰刻面共 0.2 cm 巾と施文に調和のとれたものが多い。施文帯の下部は無文帯となるが、頸部以下の文様構成は不明である。6 は口唇上にも山形施文のみられる唯一の例である。3～5・11～15 は口縁部に近い破片、16～40 は胴部破片とみられるが、18・21・22・24 等は全面施文されたものか、山形線が 5～8 本うかがえるものである。又、26 は横位と縦位の山形線が、同一器面に施文された破片であり、33 は山形文土器の底部とみられる無文の尖底部である。その他施文が明瞭度を欠く 27～32 等あって、同じ山形文系文化の中でも、施文面の相違から、これらの遺物が若干の時間差をおくものであろうことが推察される。

b 類（4 2）、縄文の施された唯一の土器片である。F・g、2 区第 1 環状根石の縁辺より検出されたもので、a 類の山形文土器片と同層出土である。器厚 0.5 cm 焼成よく黒褐色を呈する。細片であるため多くをうかがえないが、器面に整った節をもつ単節縄文を施している。おそらく往々にして、押型文系土器に伴出する縄文土器片であろう。

第 2 類土器（第 1 3 図 5 2）

本類は 5 2 が唯一の出土例で、外面調整をよくし、器厚 0.6～0.7 cm を示す胴部破片である。結節

状浮線文が弧状乃至は同心円状にめぐらされているが、平行沈線を強く引くことによって残される隆状線文に、更に浅い結節状の刻目を残している。

第3類土器(第14図43~51・53~71・第 図75~85・87・88・93・94・98)

本類は、いわゆる梨久保式に対比される要素を多分に有しつつも、尚地域的な小差を認め得るものである。以下、a~dに4分類し記述する。

a類(43~51)、44は45・47・50の胴部破片をもち、出土地点を異にする43とは別個体であるが、口唇上に丸みのある突起や、器形・施文等の在り方は驚く程類似している。後述の59と共に、口縁の斜格子状沈線文乃至は縄文が、横位帯状施文の下にみられる、樹形連続区画文が特徴的要素を示している。しかも区画内にS字状結節のみを残し、他の縄文を磨消している点は、かなり意識的である。胴部から底部にかけては、縦位S字状結節を併いながら、縄文を全面に施すものとみられ、49は底部径1.16cmを示す同類土器である。

b類(53~62)、この一群の土器は、縄文と平行沈線文による区画文をとることが大きな特徴である。器形は外傾しながら立ちあがる波状口縁を示し、53・55には突起状の加飾がある。59は段落しの偏則波状となり、56は口縁部が屈折する。59の頸部には太い隆帯が横走り、その上面に疎の爪形文を附している。60は頸部より胴部に亘る破片であり、爪形を施した隆帯の下部は、方形の沈線区画文がとられる。

c類(63~71)、地文に縄文を施し、直曲状の平行沈線文を自在に引いた類を一括した。その在り方は必ずしも一様でなく、63・65・66・69には沈線に沿って、刺突列点文が附加される。67は胴下半部の残されたややまとまった土器で、縄文が器の下部まで全面に施される。底部径は1.4cmで、僅かに開きながら直に立ちあがる。70・71は同一個体とみられる破片で、器厚0.7cm、胎土に輝雲母を含み、焼成、器面調整共に良い。地文としての単節斜縄文は非常に整い、上面に併用される平行沈線文は、洗練された円滑な流れを示し、横走する押引文も等間隔(70)で、全体に端麗な施文を示している。

d類(75~85・87・88・93・94・98)、竹管文の使つてあるものをまとめた。しかし採用した資料は、口縁部の小破片によるものが主であるため、全体の文様構成は明らかでない。口唇をはじめとする口縁部の造作は、多形を極めて一様ではない。75・76は器厚0.5cmであるが、複合口縁となるため、口唇面は1.1cmと巾広い、器面調整よく、84と共に斜格子状沈線文が特徴的である。78は波状口縁で、口縁に沿って爪形文の施された隆帯が1本めぐり、波頂部で立ち上がりをもせて横長の区画文をとるらしく、その内部を竹管による平行沈線で充たしている。79は胎土に輝雲母を含み、口唇上に小突起をもつ。突起部の内外に隆帯による僅かな渦巻文と、その外面直下に、巾広の隆帯による申訳程度の把手が附される。口縁部には隆帯による細長の横帯区画がとられ、内部は沈線による連続山形文が充たされる。なお、口唇の内側にも縦方向の細かな沈線が刻まれ、その直下に横

走する隆帯が1本ある。80は口唇上に整った連続爪形文が飾られ、口縁部に竹管を強く走行させることによってできる、曲直の浮隆線を配し、一部の浮線上を結節状に刻む。77は波状口縁部で、波頂部の内外面に三叉文が施される。地文としての縄文が真鍮的であり、横走する浮隆帯に沿って、細かな刺突文が連続する。82・83は出土地点と個体を別にするが、その文様意匠は全く相違するものがある。共に器厚0.6～0.7cm、焼成よく茶褐色を呈し、輝雲母を含む平縁口縁部である。口唇に近く隆帯による小規模な橋状把手を配し、頸部にかけては同心円状の隆帯をめぐらしている。隆帯間の内部は、施文する部分と無文地を残す部分があり、施文部は格子状沈線と三角形陰刻文を併用して、複雑な文様構成をする。81は砂粒を含む粗製土器で、つまみ程度の橋状把手が附され、横走する隆帯の根元を、縦方向に連続刺突している。85は口唇上に突起をもつ平縁口縁部で、器面調整は粗である。突起部は器を肉厚として、円形の深い凹をつけ、その直下に頸部へ走る太い隆帯がある。口唇に平行して横走する平行沈線や、隆帯に沿って平行する沈線が無難作りに引かれる。87・88・98は器厚0.8～1.0cmと厚く、胎土に多量の輝雲母を含む。施文は太い隆帯垂下による区画がとられ、半截竹管を駆使して、区画内を全面に斜格子状に切り、隆帯の両側に、蛇行する浮隆線を縦方向に残したり、浮隆線円文を配したりする。98はその底部で、直径1.3cmを示す。93・94は横走、斜行する平行沈線が主文様となり、94には太い隆帯が添付され、その上面へ押し状の爪形文をつけている。

第4類土器(第14図72～74)

72～74は同一個体の特異な施文を示す土器である。器厚0.8cm、焼成よく茶褐色である。72・73は開きながら立ちあがる口縁部で、口唇が内削りとなって巾広くなり、横走する燃糸文が施される。74は地文として複雑な羽状を示す燃糸文をもつ胴部で、弧状や蛇行を自在に描く平行沈線文が加えられ、その平行線内を磨消している。燃糸文は一見沈線の如くであり、異質な存在を示す。

第5類土器(第14図86・89～92)

刺突文が多用される土器を一括したが、その在り方は趣を異にするものがある。86は器厚0.6cm、輝雲母を含む器面調整はよい。平縁で複合口縁状となり、口縁部に横走する平行隆帯・平行沈線、更には整然とした平行する連続刺突文が組合わされて、文様を構成する。また、隆帯上及び器の内側の複合口縁上には、斜縄文がつけられる。89・90は個体を相違する平縁口縁部で、施文面はほぼ共通し、沈線と角状の刺突文を口縁上部に残す。91・92は器厚0.8～1.0と厚手を示し、輝雲母を含む。器面調整はよく、刺突列点文を主体にして、無文空間部を大きくとりながら、曲直状の構図をとっている。

第6類土器(第14図95～97)

95・96は同一個体とみられる平縁口縁部である。口縁部に不整な格子状細沈線文をもち、隆帯が1本横走して、その上面を斜めに切る刻目を附している。頸部以下には細沈線による区画文がとられるらしい。97は底部径1.06cmを示し、前者とは個体を別にしながら、同類として相違するものと

思える。

第7類土器(第14図99~101)

99は器厚1.0~1.2cmの厚手で、焼成よく茶褐色となるが、胎土に砂粒を含み、内外の壁面調整は粗雑である。平縁の口縁が開きながら立ちあがりをもせ、径部で割って胴部にはり出す変形土器である。施文は口縁の立ちあがり部に、筥掻きによる縦方向の短沈線が無雑作に密に引かれ、頸部以下胴部にかけては、縦長の筥掻き沈線が、疎にして不規則に引き下げられている。100・101は器厚0.6~0.8cm、黒褐色を呈する。頸部に2条の平行沈線がめぐり、以下胴部にかけて、全面に細く浅い平行沈線を疎に垂下させている。

以上、縄文中期初頭土器片については、その施文面に施される特徴から、7分類を試みたが、これら出土遺物を参考までに、ピット状遺構別にまとめて列挙すると次の如くである。D・g4区のピットに所属するもの、75・76・78・82・86。H・g2区のピットに所属するもの、48・52・58・59・60・62・64・83・87・88・93・98。I・g3区のピットに所属するもの、44・45・47・49・50・70・71・79。I・g2区のピットに所属するもの、51・67・68・95・96。D・g拡張1区のピットに所属するもの、54・56・63・77・84・89・90等である。個体の相異なる口縁部の破片が集中的である点注意される。

(大久保知己)

第2節 弥生土器(第15・16・17図)

今次調査の出土土器として、第~図までを掲図したが、遺構と地区別に記述してある。調査地域出土の弥生土器は、愛知県下の二反地式、水神平式系に入り、条痕文土器が大半を占め、弥生前期の土器と考えられる。この期の土器文化の流入系路であるが、一般には天竜川を経たと考えられているが、長野県木曾郡大桑村伊奈川の下条や、曲田・野尻下在宮の原遺跡の存在を考えると、木曾谷を通過しての流入したことも強く考えられる。なお松本平における同時期の遺跡には、松本市内田の横山城・同里山辺の針塚・同嶽ヶ崎の城山・同神林の境塚・東筑摩郡山形村の唐沢、なお北に下って東筑摩郡明科町塩河原の緑ヶ丘、南安曇郡三郷村の黒沢川右岸等があり、弥生期の前期文化が思いのほか早く松本平にはいつていたことが想像される。本遺跡も奈良井川左岸台地における唯一の重要資料といえる。

第4号住居址出土弥生土器(第15図)

条痕文土器 施文具及びその文様からして3ないし4類位に分類できる。1・2は器厚もあり、他の土器とことなり縄文に似た胎土をもつ。1は口唇に凸帯があり、指による押正渠が施され、口唇部の上面は器内まで突出した巾広い面をもち、断続した条痕がつけられ、内側近くには小突起の飾りが間を置いてつけられる。条痕文は器面に横につけられ、その下に斜めの条痕が引かれているが、破片

であるため全体の構成は判らない。内面には縦と横の組合せが交互につけられていると考えられるが破片のためこれも全容はわからない。2は条痕文が斜めにつけられ、内面の口縁にたれ下がったような未調査の器面があり、全体に指で押して調整したらしい凹凸のある粗雑な面となっている。口唇は平滑で1よりはすっきりしており、あまり大きくはないと思われるが、全体の器形は不明である。3・14・17・18は条痕による施文がなされ、条痕の施文の方法にもそれぞれ工夫がこらされ、横に引かれたものには、3・10・11、縦に引かれたものには、4・14があり、11は外面に、4は口唇の内側に凹痕がある。8・5は横と縦の組合せであり、5の口唇上面には押痕がつけられている。なおこの土器の内面には、黒色の煤のようなものが附着している。綾杉状の施文には6・7があり、両者とも口唇上面に施文がある。6は押しきように、7は沈線が1本や内側によって溝状に引かれている。17・18は条痕文の太さに差はあるが、上方に横、その下は綾杉状で文様構成は同じである。9・15には縦・横の条痕が組合せされており、15はやゝ崩れた感じである。9は口唇上に二条の押痕がある。12・13・20は斜線による施文であり、20は底部に近い部分である。

沈線文土器 16・19は大小の沈線による文様である。

縄文土器 21・22は縄文が沈線で囲まれたり、磨消縄文の手法が認められる。

土器の底部 23～33は土器の底部であり、底面に木葉の文様があるものに、24・25・31・32があり、他は無文である。

A～S地域出土弥生土器(第16回)

縄文早期の配石遺構や、弥生時代の住居址を出した地域であるが、弥生土器の出土は主として、西部の弥生住居址から南側の地点に多く発見され、住居址の追究をしたが、遺構を確認することはできなかった。时期的には住居址内より発見された土器と同じと考えられる。

条痕文土器 1～3は器壁も厚く胎土も砂粒を含み厚く、縄文土器の質に類似している。文様はどれも条痕文が施文されているが、1は口唇に凸帯をめぐらし、表側の凸帯上には条痕文の施文具に使用したと見られる、縦長の押圧痕が施文されている。2は1と同様に口唇部に凸帯を有しているが、横に引かれた条痕文が全面にあり、上部の口唇の外側に押痕がある。三者のうちでは一番薄手で腕上りも柔らかい。3は条痕文であるがこの土器の内面は指による調整の凹凸が目立ち、平滑面の整形は全くなされていない。4～7・16は横に引かれた条痕文である。5・16は口唇上面に圧痕がある。8～11・21は綾杉状に条痕文が施文されており、8は口唇に帯状に押痕が押され、11は口唇上面に刻目線の施文がされている。また9の内面には厚く煤状の附着物がある。13～15・18は横引きの短い条痕文が施されている。17は同じ横引きであるが線が太く、連続してめぐらされているらしい。19はやゝ斜に引かれた条痕文で上部は縦の条痕文となるらしいが、破片であるので構成がよくわからない。20は底部に近い部分で縦に条痕文が引かれている。22・23は縦と横の条痕文の組合せであるが、23は器面が荒れて、22とは違った施文具の感じを受ける。24は横と斜の条痕

文である。

沈線文土器 26~28、31~34は太い沈線により施文されており、28・32は変形工字文らしい。31は細頸の壺の上部である。

縄文土器 25・29・30は 何れも小形土器で円形の刺突があるのは共通しており、25には縄文はないが一応この中に入れた。29・30は縄文があり、25・29には条線があるが、30には無い。

無文土器 35は無文であり、遺跡全体としても出土量は多くない。

土器の底部 布目痕のあるものに37があり、網代を僅かであるが認められるものに、52・53がある。木葉痕のあるものに、40・41・44があり、他は無文である。

7~7地域出土弥生土器(第17図)

条痕文土器 1~3は表に横又は斜の条痕文が施文され、厚さが1cm~1.5cmあり、胎土も粗く縄文様の感じを受ける破片である。口唇部が内側に曲げられたように、内面には接合部にはっきりと凸帯状の部分があって特異な口唇をしている。内側は指による圧痕が認められ、凹凸な面をしている。4~7、9・13~15・18は条痕文が横に引かれ、口唇部の上面に押痕のあるものに、4・5・13・15・16・18があり、表の面に刻まれたものに4・16・18があり、上面が5・9・13・14・15がある。裏側に刻まれたものに14がある。やゝ斜に条痕文のつけられたものに、16・17があり16は表側上方に押痕がある。縦に引かれた条痕文に10があり口唇上面に押圧痕がある。10は綾杉状の条痕文で口唇上面に押圧痕がある。11・12は沈線であるが11と12は施文具が異なる。11は口唇の内側に細い縄文が施文され、真中に沈線が1本引かれている。12も口唇内側に沈線が引かれている。12のものは11より線が平たく、条痕文と同じ施文具でないかとみられる。20は横に引かれたものと、綾杉文の組合せであり、21は口唇部に帯状に縦の施文がされ、その下方は横に引かれた条痕文が続くらしい。28は表面が荒れておりはっきりしないがやゝ斜の条痕文が引かれているようである。23・30・31は縦、横の条痕文が施文され、32はこれに、のたれの条痕文が加わっている。24・34は横に引かれた線と波状文と共通な文様構成をしているが、24は浅鉢の口縁らしく口唇の上面には条線が引かれている。34は頸部の一部らしい。35は横に、41・42は斜に条痕文が施文され、胴部の破片らしい。36~39は綾杉状に施文されており、39は下部がはっきりしない点もあるが一応この仲間に入れておく。

沈線文 27・40・43をこれにしたが11等もこれに入れるべきかも知れない。40は沈線の間に刺突文があり、27は口唇の表と裏側に押痕がつけられた口縁である。下部の沈線の間の矩形の刻目も変っている。43はへら状施文具で施文されている。

縄文のある土器 19・22・26・29・44~46が縄文のある破片である。19は口頸部で口唇の表側に押痕があり、縄文が施文されているが下部迄は続かないらしく、拓影には、はっきり出なかったが破片の下端に綾杉文らしい文様の一部が施文されている。22は19と同様小形壺の口頸部であ

るが、口唇に帯状に無節の縄文がめぐらされている。内面に巻上らしい手法の継目が認められる。29は沈線の間に細い縄文が認められ、磨消縄文の手法で施文されているらしいが小破片のためよく判らぬ。44・45は出土地点は少し離れるが同一個体の破片と認められ、沈線と刺突文で飾られ、一部に縄文が認められる。胎土は砂が多く悪い質である。45が下部になると考えられる。46は縄文の地に渦巻状の沈線がありその真中に突起したこぶ状の飾がつけられている。器質は、44・45と同くあまりよくない。

(小松 慶)

第3節 石 器

本遺跡からの石器類の出土数は極めて少ないが、縄文・弥生系文化の複合遺跡の關係上これを大別して、縄文文化系に属する石器類と弥生文化系に属する石器類とする。

(1) 縄文時代の石器(図版27)(第20図)

A 凹 石 (図版 27, 1・2・3)

総計3個、ともに片手で持てる大きさと長楕円形をなしている。その1は表面に5つ裏面に2つの小凹穴があり、他の2、3には表面に1つの小凹穴があって、材質は砂岩であり若干の火熱をうけている。弥生系遺跡の近傍から出土するも、弥生系遺跡から出土の類例がないので縄文系遺物として集録した。

B 石 皿 (図版27、第20図4)

石皿の出土は少なくとも1個であった。扁平な溶岩質の安山岩をもって作られ、その表面は粗雑であらう、ものを摺りつぶすのには好都合であろう。表面上には、長20cm巾11cm、深さ1.9cm溝状の凹部がある。

C 石 斧 (図版27、第20図5・6・7・8・9・10・11・12・14)

出土の総計14.5個で、うち5～6個は、破損が甚しいため本報告書から除外した。

5・6・7・8・9・10・11・12の8個は打製石斧であり、遺跡の西辺を流れる瀬川の川原石である硬砂岩を使用している。

器形には特徴はないが、刃部にはそれぞれ使用痕がある。恐らく土工具として使用されたものであろう。14は1個のみ磨石斧で、その上半部を折損し紛失しているが、定角式石斧で材質は堅く刃部及び頭部には、使用痕か、或は折損後に川に洗われて磨滅したと思われる痕が認められる。

D 打製石剋丁 (図版27、第20図15)

出土数は1個である。西辺を流れる川原石の硬砂岩を使用している。川原石を薄く剥ぎ、その一方を刃部とするため更に二次的加工をして、刃部としたもので、半月形をなし、断面は薄く三

角形をしている。刃部には相当の使用痕が認められる。

打製石砲丁は、食用植物の採集の際に使用され、また調理用として用いられたものであろう。打製石砲丁の出土は近年松本市女鳥羽川遺跡（縄文後・晩期）、その上流に当る東筑摩郡本郷村種倉の塩辛遺跡（縄文中期）、その他松本市岡田の田溝池遺跡（縄文中期）などから2~3個ずつ発見されている。

E 不明石器（図版27、第20図13）

この石器、鎮川の川原石（硬砂岩）を打割り、その薄片の一方に二次的に加工して刃部を作り、他の一方を打欠いて、摘み状としたもので、その形態からすると、大型の石匙と見られるもので刃部に使用痕が見られるが、石匙とするにはあまりにも不細工なので敢て不明石器とした。

F 棒状磨石（図版27、第20図16）

この石器は、自然の川原石である棒状の安山岩をそのまま利用したもので、その一方に磨滅した使用痕が残っている。この様な棒状磨石は、主として縄文早期の遺跡から出土している例が多い。

H 石 鏝（図版27、第20図26・27・28・29）

石鏝4個のうち、26は縄文早期集石跡と推定されるE2(→35)の集石内から出土し、その近くの同位層の集石内から、早期の押型山形土器の尖底部が出土している。27は第2地区土師第1号住居址西北隅の床上から出土したもので、恐らく附近から流入したものであろう。28はE2(→25)の第二層から出土したもので、その形態から、この同位層にある縄文中期文化に伴うものであろう。29は第一地区のI Tのあげ土から発見されたものである。

I 黒曜石剝片（図版27、第20図33・34・35・36）

いずれも長さ3.2cmより3.9cmの黒曜石の剝片で、石器製作の際における剝片かとも見られるが、なかには細石器と見られるものもあるので、参考のため集録した。

(2) 弥生時代石器（図版27、第20図）

A 石 斧（図版27、第20図17・18・19・20）

計4個、ともに鎮川の川原石（硬砂岩）を用いている。17・18・19は、川原石を打割り、その一面には尚自然面を残したまま加工したもので、その刃部には、使用痕が残っている。20は、大胆な加工を加えて細長い石斧を作っている。この石斧について大場磐雄博士は、弥生文化の所産であると説明されている。以上は総べて石斧としてではなく、土耕具として使用されたものであろう。

B 石 匙（図版27、第20図21・22）

計2個、ともにチャート製で、1つは縦形他は横形のもので、弥生式土器片と伴出している。両形ともにその使用目的によって作られたものである。

C 石 鏃 (図版27、第20回23・24・25・30・31・32)

計6個のうち5個は有柄で、外の1個は下半部折損のため不明である。ともに黒曜石製で、このうち23・24は細長く鋭く弥生式の打石鏃の特徴をよく表わしている。

(倉科明正)

石器一覧表

石器番号	出土地	種類	大きさ	材質	所属	備考
1	E17、-25	凹石	14.0cm×10.5cm×4.8cm	砂岩	縄文	表面3裏面2の小穴あり
2	11、-53	"	15.5 × 9.2 × 5.2	"	"	小穴1
3	J16、-35	"	13.8 × 8.4 × 5.2	"	"	小穴1
4	H3、-25	石皿	24.5 × 21.6 × 8.5	安山岩	"	20cm × 11 × 1.9の凹部
5	I9、-28	石斧	17.0 × 8.0 × 1.8	硬砂岩	"	
6	I'1、-80	"	12.7 × 4.8 × 1.5	"	"	
7	D10、-18	"	12.2 × 4.0 × 1.8	"	"	
8	オ7、-20	"	10.0 × 4.0 × 1.2	"	"	
9	第一地区上げ土	"	15.0 × 5.7 × 2.6	"	"	
10	I10、-25	"	10.7 × 3.8 × 2.2	"	"	
11	D3、-22	"	10.4 × 5.0 × 2.5	"	"	撥形
12	D4、-47	"	10.0 × 6.0 × 1.2	"	"	"
13	オ6、-38	石匙	6.6 × 8.5 × 1.5	"	"	石匙か不明点あり
14	D15、-25	磨製石斧	7.8 × 4.5 × 3.2	不明	"	上半部折損あり
15	O2、-40	石彫丁	10.6 × 5.1 × 1.2	硬砂岩	"	打製石彫丁と推定
16	D6、-35	棒状磨石	14.8 × 4.3 × 2.5	安山岩	"	早期文化に伴うものか
17	F17、-35	石斧	14.2 × 8.0 × 2.5	硬砂岩	弥生	刃部に使用痕あり
18	I16、-15	"	10.0 × 6.0 × 1.4	"	"	"
19	G15、-30	"	16.0 × 7.2 × 2.3	"	"	"
20	チ12、-30	"	19.6 × 5.5 × 2.6	"	"	大場博士認定
21	H16、-50	石匙	3.8 × 4.6 × 0.7	チャート	"	横形
22	I16、-50	"	4.5 × 3.6 × 0.7	"	"	縦形
23	E18、-30	石鏃	2.1 × 1.0 × 0.4	黒曜石	"	鋭くて細く有柄
24	E18、-45	"	2.2 × 0.7 × 0.2	"	"	"
25	H16、-70	"	2.5 × 1.4 × 0.5	"	"	柱穴中より出土
26	E2、-35	"	1.7 × 1.5 × 0.4	チャート	縄文	早期文化に伴うものか
27	第一住居址床上	"	1.7 × 1.3 × 0.2	黒曜石	"	周囲から混雑したもの
28	E2、-25	"	2.5 × 1.4 × 0.4	チャート	"	"
29	上げ土	"	1.5 × 0.7 × 0.3	黒曜石	"	"
30	F16、-45	"	1.7 × 0.9 × 0.3	"	弥生	"
31	I15、-40	"	1.6 × 1.1 × 0.4	"	"	"
32	I15、-40	"	1.5 × 1.0 × 0.3	"	"	"
33	第一住居址上げ土	石片	3.9 × 1.4 × 0.3	"	縄文	用途不明
34	"	"	3.6 × 1.7 × 0.4	"	"	"
35	"	"	3.9 × 1.9 × 0.9	"	"	"
36	"	"	3.2 × 1.9 × 0.5	"	"	"

第4節 配石遺構と陰刻文を有する石（図版18）

本遺跡を調査された大場磐雄博士から、「配石遺構と陰刻文を有する石」と題する一文と写真を寄せられたので、参考のためこれを記す。

「昭和43年3月東京都町田市小山町田端で発見された配石遺構は、東西10m、南北9mのほぼ環状を呈し、その中心部を除いて周囲に大小の河原石が集積され、所々に大形の石碑や柱状自然石が現に樹立し、またはもとは立っていたと推定される状態で発見され、さらにその間に自然石で円く囲んだ墓、土壇墓が認められるが、全体に集石と立石群の連続といった観を呈し、なかなかの壮観である。時期は遺構内から発見された土器からみて、縄文後期一晩期に亘っていると認められた。

ここから4個の刻文石が出ている。まだ発見される可能性があると思うが、全部の石を調べなくてはならないので、さし当り見ることのできるものだけについて記す。その中3個は遺構中にあり、何れも付近の境川から採集された河原石（砂岩質のものが多い）に、陰刻したもので、一例を示すと、南側の環状集石内にある組石の内に存するものは、長径20cmの自然石の平らな一面に、X状の線を数本刻んである（図版18）。

つぎに同じ南側の集石墓の近くにある組石の内には、同じくらしい自然石に横線が3本刻されているが、これは点線形で彫ってある。もう一つは西北部の遺構中にあるもので、長さ50cm、巾30cmくらいの自然石の一面に格子目状の刻文があって、これも点線彫りで且つ朱が施されている。格子目は大小12ある。以上の二つは、線が浅く写真にもよく写らない。

さらにもう1個は既に掘り上げられた自然石（不整形で長さ20cmぐらい）の一面に、円や弧線が刻んである（図版18）。以上配石遺構中から発見された刻文石について記したが、その意味するところは不明であり、今後資料の増加をまち、比較研究する必要があると思う。（大場磐雄）

このような大場博士教示を参考として考えてみると、本遺跡出土の線刻石は縄文早期と縄文後晩期の差はあるが、ともに集石（配石）遺構中からの、発見例であるということに共通性がある。また田端遺跡の場合は配石遺構の中に、20余の墓壇が確認されたということで、祭場と考えられるコブシ畑遺跡の場合とは用途の上に差異がある。このように配石（集石）遺構中に墓壇のある例は、前記した北海道忍路郡三笠山の環状石籠の好例があり、後晩期において各地に多くその例をみる。只早期のものである当遺跡の場合にはその確認はない。

早期からの祭場としての集石遺構の例が、時代の下るとともに基地化し、本来の祭場の広場に部落の英雄的なものを埋めて、ともに祭るという習俗が生じたのではないだろうか。

第5節 土師時代以後の遺物

1. 土師器 (第18図1~9、図版11)

土師器は発掘地点全域より出土しているが小破片がほとんどで、器形の判明するものは住居址および、その周辺からの遺物が中心である。器体は坏・甕の破片のみで他は見当らない。

A 坏形土器(第18図1・2)

1はク13の落込みより出土したもので、器厚3mmの薄手で口唇はややそりもち、外面上部には黄なでのあとがみられる。胎土はやや粗く、茶褐色を呈する。2は高台付でD16より出土している。高台はやや開き、底部中央には1cmあまりのキズがあるが意図的なものではない。胎土は砂礫を含み焼成は柔らかく、明るい赤褐色を呈する。

B 変形土器(第18図3~9)

3~5はいずれも口径30cmあまりと推定される変形土器の口縁部である。3・4は第1号址よりの出土であり、3は内外面ともへけ状の整形のあとがみえる。口縁は外反して肩部から大きくふくらむものと思われる。4は直立する口縁をもつ。5は7と同形のもので第2号址上面より出土したものである。これら3点は明るい褐色で、胎土にやや炭母を含み、特に5は胎土が精選されて焼成もよい。6はD2より出土したもので、直立する口縁で複合口縁のように段をもっている。頸部はみがかれており、茶褐色で一部にススが附着している。胎土は良い。本類の中では時期的に古いものと思われる。

7・8は第1号址の竈より出土したもので図示しなかったが、伴出の破片は数片ある。7は鳥帽子形の肩部のはらない甕と思われ、へけ目状の整形を示すものであり、内面下部には斜めに指腹によるものらしいナゲ跡が残されている。8は胴部で、外面は太いへけ目が施され、内面はごつごつとして、指巾位のくぼみが縦に数本つけられている。共に赤褐色を呈し、内面は一部黒色をおびている。Gは第1号址床面より出土した底部で、平底であり、破片上部にへけ目が施されており、7・8と同類の底部であろう。色調は外面わずみ色を呈し、火にかかっていたことを伺わせる。内面は明るい茶色で胎土はやや粗である。

これらを平出遺跡出土の遺物と比較するならば、第三様式ないしは、第四様式に類似するもので、土師時代中期中半および後半に該当する。

2. 須恵器・施釉陶器(第19図1~16)

須恵器および施釉陶器は土師器に比して出土量は少なく、第1号址床面より出土したものがほとんどであるが、器形の判明するものが多い。施釉は灰釉も含めて17点なので一括して扱い、出土地点を記述するもの以外は第1号址出土である。器形も土師器と類似するが変形が加わる。

A 坏形土器(第19図1~10)

1は第2号址上部より出土したもので、やや内彎して開く。底はへらおこしで中央がややもり上って丸底風である。胎土はわずかに砂粒を含む。焼成はやわらかく、色調は口唇周辺がねずみ色のほか下部は白茶色である。2も1同様に柔らかく、底部はへらおこしがうまくいかに凹凸がある。3はイ9より出土したが、第1号址上部であり、2と同様のへらおこしで、内面には水引き整形による段を有する。色は内面拗黒色、外面は灰白色である。4は須恵特有の堅緻でねずみ色の坯で、底部の切りはなしがらく段を有する。また底部は中央が上る。5は内面水引き整形、底はへらおこしでロクロは右まわりである。色調はみどりがかったねずみ色で4より柔らかい。6は蓋で堅緻な焼成で、右まわりのロクロあとがうかがえる。内面は水引き整形、つまみは平らで、全体に浅く、口唇上部で勾配がゆるくなる。7・8は高台付で7はク15、8はD2出土で、ともに高台は直立している。7は一部灰釉がかかっている。9はJ16出土の灰釉で糸切り底である。高台のつけ方やつくり方はあらく、内面には凹凸がはげしい。灰釉は内面に均一に施されている。10は第2号址出土のねずみ色をした浅い坯である。高台の広がり小さく、ロクロ整形の線が美しい。

B 甕形土器(第19図11~14)

11~13は大型甕の胴部で内面に波状のタタキ目のあるものと、ないものがある。11は第1号址の甕より出土したもので、外面は浅いタタキ目の上に緑釉がかかっている。14は広口の甕で、口唇直下・短い頸をもって小さい肩部へとつながるもので、これらはいずれも灰白色の堅緻な焼成である。

C 壺形土器(第19図15・16)

15は1cmあまりの短い口縁から大きく肩をはって、円形をなす壺で、口唇より暗緑色の釉を施したもので、猿投窯出土のものと類似している。内面はロクロ整形を示し、黒っぽいねずみ色を呈する。16は口縁がつよく外反し肩部がはって円形をなす壺で、口縁以下はタタキ目をつけられ、内面はロクロ整形のあとはあるが、最大径の胴部でつなぎ合せたらしく、そのあたりは凹凸がある。焼成は柔らかく、色調は灰白色を呈している。寡聞にして類例を知らないが、古い様相もあり、中期中半に比定したい。

D 碗形土器(第19図17)

17は天目釉の碗形土器の破片で口縁部はケ4の石だまりより出土し、下部はD2よりの出土であるが同一器体で接合される。色調は黒味のつよい黒褐色で、口唇は褐色を帯びる。胎土は白色で精選され、焼成もよい。

第4章 考 察

本遺跡の調査結果については、前章において各執筆委員により述べられているが、総合的な所見を述べて考察とする。

第1節 複合遺跡であること

本遺跡の発見の端緒が、昭和33年の客土の際のことであり、その際縄文中期と土師時代との複合遺跡であることが確認されていたが、今次の発掘調査により、その内容がさらに深められ、縄文早期・縄文中期・弥生・土師の4期にわたる複合遺跡であり、さらにまた中世遺物の出土もあったことから、縄文早期から中世末、さらに中世に及ぶ遺跡地帯であることが判明した。その中で特に注目されるのは縄文早期の石造遺構である。

- (1) 縄文早期の集石遺構は、前章報文のごとく、広範囲にわたる集石部と、その上に構造された多くの環状組石・マウンド状の集石等であるが、早期における集石遺構の、このような大規模で複雑なものの発見例がないことから、この集石遺構を早期のものとするのは如何かとの説もあり、現地を調査した国学院大学客員教授の大場磐雄博士も、伴出した縄文早期土器片の出土状況をみながらも、なおかつ遺構が整いすぎていることについて若干の疑義をもたれた。

調査団の意見としては、この遺構のきめ手となるものを、集石部の組石のある土層から発見された、早期押型山形土器片の発見を唯一の手がかりとして、一応早期の構造物であると推定したのである。他の小規模な早期集石遺構（墓塚・集石炉）の場合も、大規模な集石遺構の場合も、伴出する遺物である土器石器の年代をもってこれに当てるを常識としているからである。本遺構の場合は、層位的にみて、上層は現代の西耕地部落の中の農地、もと畑地、のち水田、その下層は中世の住居址（礎石・石臼・天目破片等の出土による）、一部墓地（墓塚）。その下層に古代の土師住居址（住居跡確認3・土師・須恵・灰釉陶器出土）、その下層は弥生式前期（この地方として）、さらにその下層に縄文中期初頭（梨の木式の土器石器）、その下に問題の石造遺構があり、そこに早期土器片の出土をみている。

このように中間に空白期間はあるものの、縄文早期から中世にわたる遺跡であることには間違いない。問題の早期遺構の層位をなお明白に詳説すると、この集石遺構の発見されたコブシ畑の地は、

かつては付近の水田地帯より1 m余高く、南側にある現在の住居地帯と、ほぼ同等の高さで、そこにコブシの木があり、土地の所有者によりクブシ畑となまって呼ばれてきたところで、その切株は最近まで残っていたということである。その畑地帯を、厚さ1 m余の除土をし水田とした際、前記の遺構や遺物（縄文・土器）の発見があったのである。今次の調査では、その際の遺構の残存をも探しながら、その下層に及び、コブシ畑地帯からも、またその東方からも、新たな遺構・遺物を発見しこれを総称してコブシ畑遺跡と呼んだのである。問題は縄文中期遺構の床面と、集石遺構のある面との水平的な違いであるが、これは調査の際に最も注意したところで、第二次調査にはいり集石部の全容を出すため、四周を掘り進めた際、集石部西北部のマウンド状集石の上層において堅固な中期住居跡の床面を発見し、その下に集石部のあることを確認している。この集石部は、中心が高く、四周は内地層と接するあたりにかけて次第に傾斜し低くなっており、集石部の敷石の上に造られたマウンド状集石も、現状の組石も、使用の礫石の大小により高低を生じており、同一水平面ではなく、ある部分は縄文中期土器の出土層に接する箇所もあるが、上下の関係は明らかに40 cmから5 cmの差異が認められる。またこの集石遺構からは、他種の土器（早期押型山形文以外）の混在がないところから、完掘未了の現段階においては、これを早期遺構でないと断定する資料はない。

- (2) 縄文中期遺構は中期初期の梨の木式の土器がそのほとんどで、これに伴う石斧・石皿・石匙・凹石等を出しているが、昭和33年客土の際発見されたという炉址など、住居跡のきめ手となるものは発見されず、集石地帯の上層の東南部と東北隅と西部および集石地帯の北辺8 m余の別地点に、鉢形土器等を発見したにすぎない。従って住居址を確認する柱穴の発見もなかった。おそらく昭和33年の客土の際、破壊されてしまったものであろう。しかし、その所在を証明できたのは一つの収穫であった。
- (3) 弥生時代の遺跡は調査のはじめから、遺跡の東部と西部に土器片の発見があり、すでに農耕の際攪拌されていることがわかった。もと畑地であったコブシ畑では、昭和33年客土の際には発見されなかったが、今次の調査ではまず西部の用水の堰に近い低地帯の黒土層から、相当量の土器片の出土があり、その破片が当地としては未発見の古式のものであったことは前章報文のとおりであるが、第2次調査において該地区の除土を完全にしたとき、トレンチをはずれて北方に1個の堅穴を発見した。出土の遺物は条痕による弥生式土器片多数で、その器種は壺・壺を主とし、口縁部・底部も多かった。その系統は、近くでは松本市内田の横山城遺跡発見のものに類似し、前期としてよいものであるが、前章執筆の小松虎氏は、なお類似遺物を木曾谷の南野尻遺跡に求め、同期弥生文化の松本平進出の経路を木曾谷からとしている。これはすでに縄文早期以来の場合にもあてはまることで、当然の考察といえよう。土器の底部は円形平底であるが、中に木葉痕のあるもの、平織の布目のあるものが相当量発見されたが、これはこの時代の文化を知る貴重な資料である。なお特

記することは、伴出の石器がすべて打製で、弥生遺跡に伴う、磨製石鏃や、磨製の石筴・大型蛤刃石斧等の発見が一つもなく、遺跡地帯の床面からは小形の精巧な黒曜石製の打製石鏃、またチャート製の石匙を出しており、なお縄文文化の影響をうけていることを物語っている。

なお調査終了後、遺跡の東部水田地帯整地の際発見、トラクターの操作により数個の同期住居址と、土器の発見があったことが、報告されたが、これは今次調査とは無関係のものである。

- (4) 土師時代の住居址は、今次調査によってはコブシ畑集石遺構に接して東部に2個、また西部の弥生式住居址に重複して1個発見されているが、集石遺構の上からは全然遺物さえも発見されなかった。しかし昭和33年客土の際の発見遺物には土師器の坏・甕・壺、須恵器の坏・甕の破片等が発見され、今井小学校に集積されている。しかし客土今次調査で集石部から発見されなかったのは、客土の際遺構がこわされその痕跡を残さなかったものであろう。この遺構の年代は、一部に古式の須恵器を出しているものの、土師器の形式、また灰釉陶器をまじえているところから中期奈良時代のものと考えられる。同期の遺跡はこの地帯の南に続く地帯にもあり、灰釉・須恵・双面珧などを出しており、広範に土師時代の集落が発達していたことを語っている。前章報文の執筆者神沢昌二郎氏は住居址の入口を西方(竈は東壁にあり)と考えているが、その場合は西方鎮川の低地に面していたことになる。

弥生前期から土師中期ととんでいることについては生活条件に変化を生じたことによるものであろう。

- (5) 中世の遺構としては、特別みるべきものはなかったが上部に集石のある、伴出土器のない墓塚様のものが2ヶ所程発見されている。また室町時代の陶器(黒釉天目)片の発見、江戸時代以前とみられる石臼の破片などが発見され、中世の生活にも関わりがあったことを物語っている。

以上より、今井コブシ畑遺跡は複合遺跡であったことがわかったが、現在は部落の住宅地からはずれているのはなぜだろうか、それは、遺跡地帯の西方約100mの地を流れる鎮川の流路がしばしば変化し、たえず微地形的な地形変化がおこなわれたこと、またこの地がコブシ畑を中心として一段と高く丘状を呈し、縄文時代からの信仰遺跡としての地位を保っていたからであろう。

第2節 集石遺構について

集石遺構の中で、特異なことは前にも触れたように、縄文早期の遺構としては、例のない大規模なものであるということ、その構造が集石部の上に石組がつくられているという複雑なものであるという二点である。

- (1) 規模については、縄文早期の集石遺構ながら、14m以上推定20mに及ぶ径をもち、そこに集め、敷かれ、覆まれ、組まれた構造物が多く存在することであるが、構造の過程において、それぞれの組石が、それぞれの箇所に組まれたり覆まれたりして、それが自然に集合して大きな集石遺構

となったものか、あるいは広範圍の石敷の祭場がまずつくられ、その地帯の中に組石部や積石部が若干の時をおいて造られたものかは、この集石遺構の意義を考える上に重要なことである。

- 2) 構造上の特色としては、まず近辺を流れる額川の川原石(ほとんどが硬砂岩)径20cm~50cmのものが現地に運ばれ一定の集石地帯ができ、その上にマウンド状の積石(平円錐形)。環状の組石、しかも環状組石には敷石上に10cm~15cm高く組み上げたもの、また逆に敷石平面から下げたものと、凹凸二様のものがあり、あたかもそれが対になっているかの感をいかせている。このような遺構の構造は、今まで発見例のないことであるが、さらに環状組石が二重になっているもの、立石のあるものと変化に富み、複雑である。集石部の断面を縦横に切り、四周を充分に掘り掘げ、完全な調査をしないので、今にわかに結論は出せないが、環状組石の凸部も凹部も明らかに集石(敷石)の上に組まれていることは事実である。

3) 線刻のある石の発見

つぎに集石部のはば中央にある立石のある環状組石(凸)の前に一列の礫線があり、その前面(西面)に1個の線刻のある石が、最終日の清掃の際に発見された。凍りついた土を水を掛けて清掃していた際の発見で、その石は長径42cm、短径30cm余の不整球状の硬砂岩で全面は川原の転石としてあったため、自然に磨かれ平滑であるが、ここにははっきりと弧線を中心とした線刻がほどこされている。これは原始絵画というには具象的でなさすぎるが、強いていえば人面、または人体の一部、また弓に矢をつがえたもののようにも見られる。県下での発見例では、茅野市尖石遺跡の線刻絵画のある石(太陽・樹木・人物がはっきりしている)や、県外での発見例では秋田県由利郡矢島町、同雄勝郡雄勝町(旧秋の宮村)、北秋田郡阿仁村(旧大阿仁村)からの鮭石のようにはっきりしたものもある。

ただ昭和43年に大場碧雄博士の調査された東京都町田市小山町田端の配石遺構の後期集石遺跡中の数個の石にはコブシ畑遺跡の場合と同様な意味不明の線刻の石が発見されている(第 四 図)。以上の例はいずれもコブシ畑遺跡よりは新しい例で、尖石は中期居住址中より、鮭石は後期、町田市の田端遺跡の場合も同様である。

しかし最も古い線刻の石は愛媛県上浮穴郡美川村大字上黒岩の上黒岩岩礫遺跡から発見された緑泥片岩製の女神像と呼ばれるものとされている。これは同遺跡の第9層からの出土で、我国最古の土器といわれる縄壜線文土器、これに伴出する杏仁状尖頭器・有舌尖頭器などとともに発見されたものであるが、これも甚だ具象的でない。

これらのものの中では本遺跡の場合は最も石が大きく、その線刻が力強くきざり込まれている。尖石遺跡の場合は軟質の石をより堅い石で引掻いたかたちで、線も細く弱く引かれてあり、上黒岩岩礫遺跡の場合も同様であるが、本遺跡の場合は、刻みの幅も3mmと広く、深さも2mm余で堅い硬砂岩の面にこまかく刻みこまれ、その刻み目は鼠の歯形の如くである。これは石面に刻まれた20

数本の線が同様で、柔かい石に対して引掻き線で描いたというようなものではない。しっかりと刻み込まれた作意の描線である。

この石の年代を何と認定すべきであるか、そのため、最終日に凍土を湯でとかしながら周辺や石の坐りを検討して調査したが、この石も他の組石のあり方と同様、堅緻な黒褐色粘土層中に埋めこまれたかたちであり、極微量の山形文土器の破片、木炭末の検出をその付近からみている。こうした事実からして、この石の年代を集石遺構築造と同時期と考えることはどうであろうか。

なお同様線刻の石の発見をすべく、できるだけ露出の石を調査したが、その中に中央環状組石(凸)の立石の面に若干の線刻、また径6mm余の凹みが見られ、他にも同程度のものが数個あることがわかった。

さてこの石を何と考えるべきかであるが、これは、この集石遺構の中の一要素で信仰上の理由のあるものと考えるに至当と思う。そのため、つぎにこの集石遺構の意義用途について考えてみたい。

- (4) 特別史跡に指定されている秋田県大湯遺跡の環状列石のほか、北海道の忍路の環状石籠、本県では大町市上原の環状石籠、東京摩都四貫村井刈遺跡、伊那市の石駄珂遺跡があり、ともに集石(敷石)・立石等をもっているが、これを墓地説とするか、他の信仰遺跡とするかは諸説あるところである。本遺跡の場合は墓地説を証明する何物もなく、現時点においては信仰上の遺跡、すなわち祭場の跡と考えたい。祭場とは神祭りの場であるが、その神は祖霊であったり、生活に恩恵をもたらす神であったであろう。明治以来から知られている北海道忍路郡塩谷村土場の三笠山の遺跡は、東西22m、南北30mの楕円の環状列石で、高さ1m余の立石が環状に並び、アイヌ部落の人達はこの立石に鮭を供えて祭をしたと駒井和愛博士も日本考古学辞典の中で言っているが、博士はこれらをアイヌの墳墓と関係があると説いており、現に本州の同様遺跡の中には列石内の小集石部の下に墓壇のある例も報告されている。本遺跡の場合、古代には多くの鮭・鱒が産卵期に上ってきたであろう額川にほぼ接しており、その位置も平地状の台地上にあり、東西南北の眺望もよく祭場として適地であったと思われる。ここを祭場とみた場合は、当時の人々の集落はどのようなものであったであろうか。きっとこの付近の程遠からぬところに集落が営まれたに違いないが、現在はそれを明確にしがたい。ただ同期の遺物を出した場所が、付近の各所にあるので、当然集落のあったことを認めてよいであろう。すなわち、この遺跡は全く突然に営まれた遺跡ではないのである。

第3節 遺跡の不連続性について

本遺跡は前記のように縄文早期から土師時代までの複合遺跡であるが、縄文時代においても前期・中期の一部を欠き弥生時代も中・後期を欠き、土師時代も前期を欠いているが、この理由は何であろうか、これは前文にも触れているように、額川の流路変更や、その他の理由によるものであろう。

そうした場合、歴史の空白部はこの集石遺構にも及び、早期に集石遺構が構築された後、前期・中

期とその信仰が継続したことは考えられず、早期に構築されたのち領川の流路変更等により自然に埋没し、その上にまた新たな生活があったものであろう。

早期文化の当地流入の過程も、木曾谷経由と考えられる面があるが、弥生期の場合もその推考が成りたつことは、前文にも述べてあるとおりでである。

土師時代においては、当地は無古墳地帯であるが、庄園関係の開発であるか、国府関係の開発であるか、または自然的開発によるものであるかは、にわかには決しがたい。

最後に本遺跡の調査は緊急調査によるもので、季節・時期・費用等の点で完全調査でないことを遺憾とし、改めて本格的調査が近い将来において実施できることを期待して結びとする。

(原 基 藤)



図版 1 東方からみた遺跡



図版 2 西方からみた遺跡



圖版3 集石址全景



図版4 F, Gグリット2区の第1及び第2環状組石



図版5 HT1区第3環状組石



図版6 Hグリット拡張1区の第4環状組石



図版7 Fグリット2区の第5環状組石



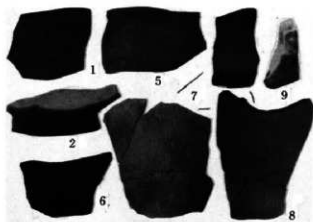
図版 8 I・Hグリット各4,5区の第3積石部



図版 9 Iグリット2区のピット状遺構と遺物



図版10 南方からみた第1号住居址と第2号住居址



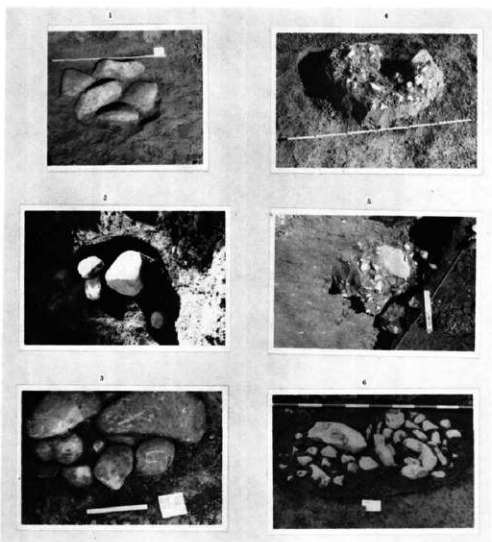
図版11 土師器



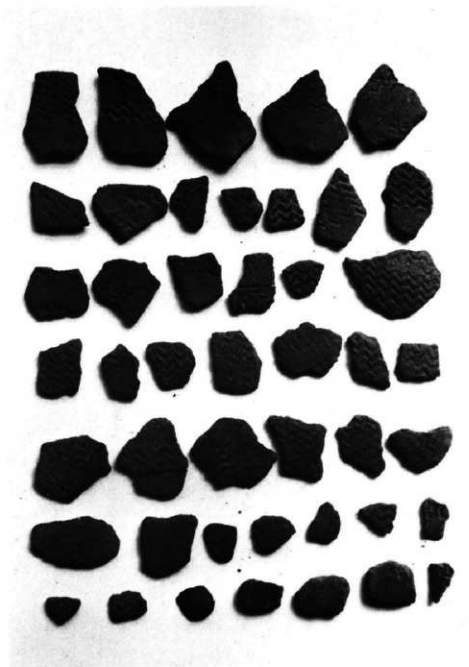
図版12 第1号土師住居址



図版13 第2号土師住居址



图版 14 各种配石



図版 15 縄文早期山形文土器片（第 1 類土器）



図版 16 G 2, -50 cm 押型文土器出土状況



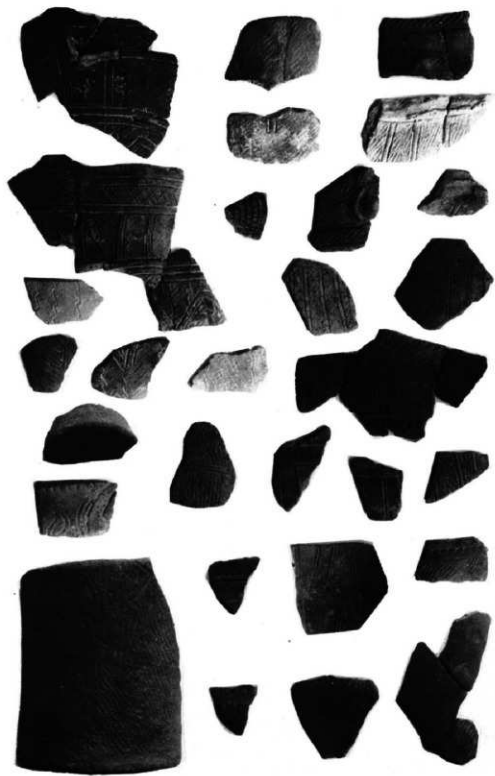
図版 17 線刻のある石



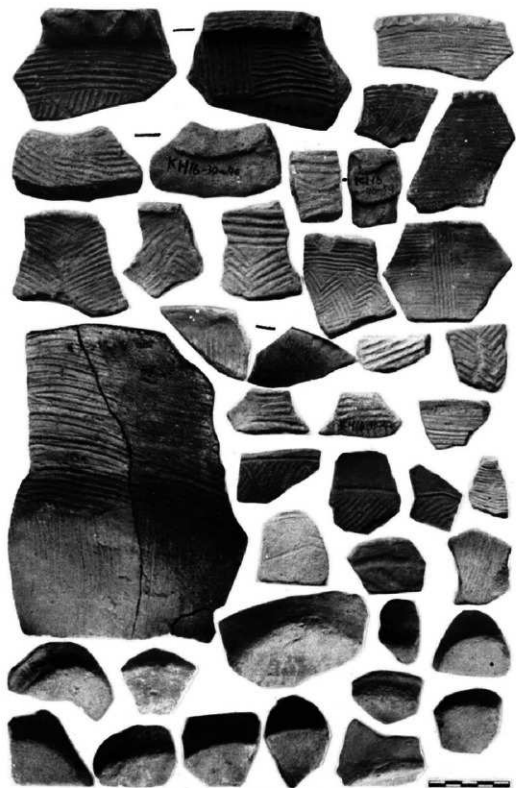
図版 18 町田市田端遺跡出土線刻の石
上 直線文，下 曲線文



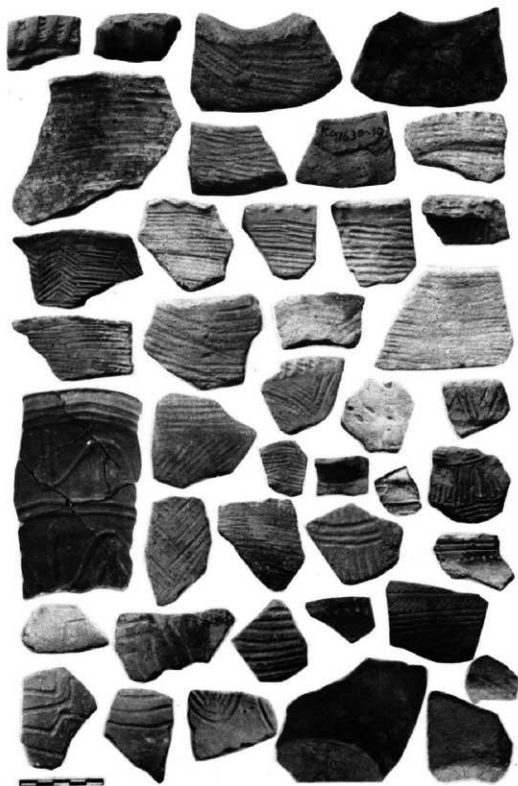
圖版 19 繩文第 3 類・第 4 類・第 5 類・第 6 類・第 7 類土器



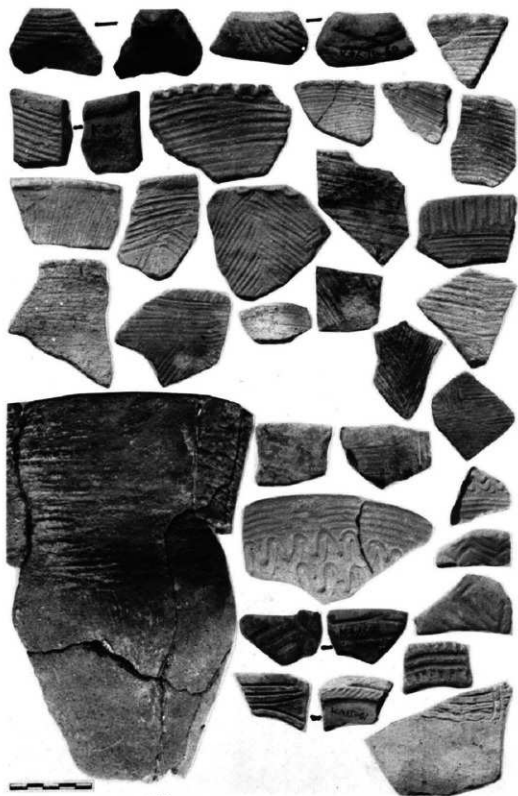
図版 20 縄文第 2 類・第 3 類土器



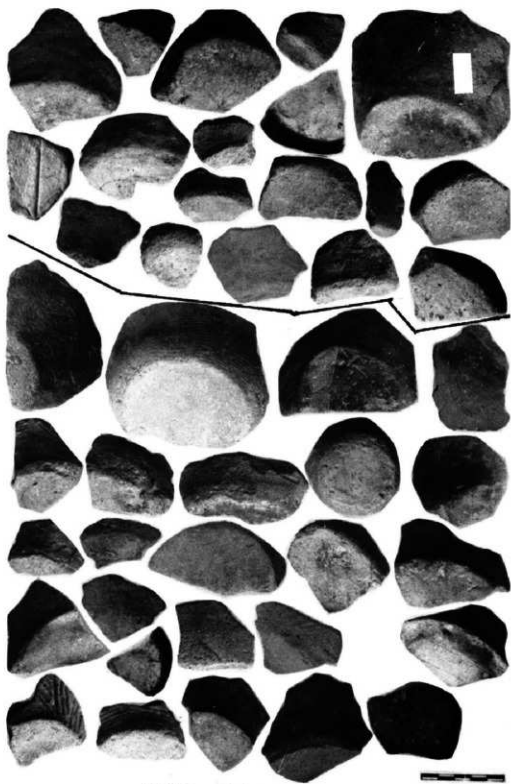
图版 21 彌生住居址出土土器



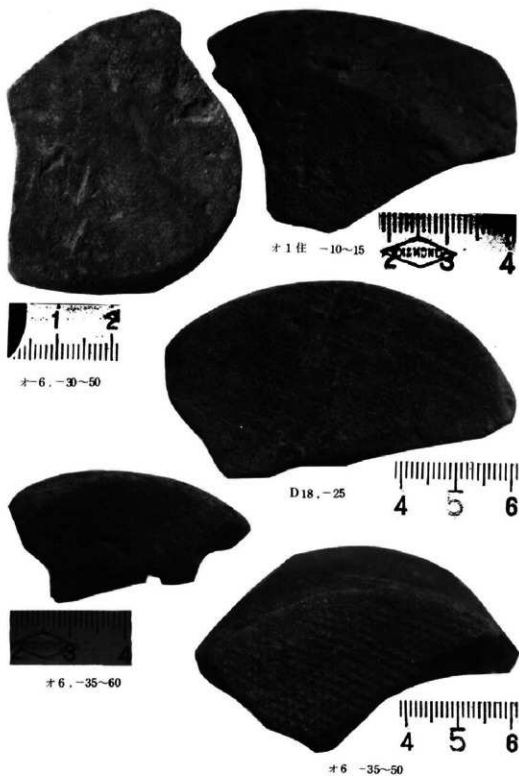
图版 22 A~O地域出土彌生土器



図版 23 ア～ソ地域出土彌生土器



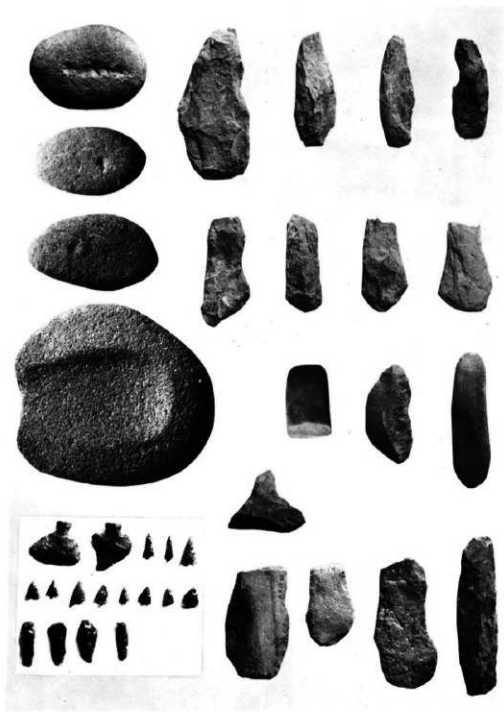
図版24 彌生土器底部
上 A~O, 下 ア~ツ出土



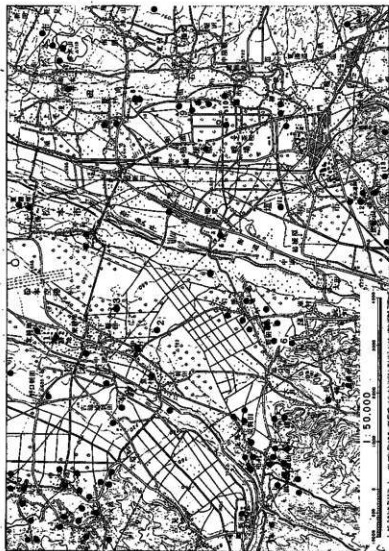
図版 25 布目痕のある彌生式土器底部



図版 26 土師住居址出土の須恵器

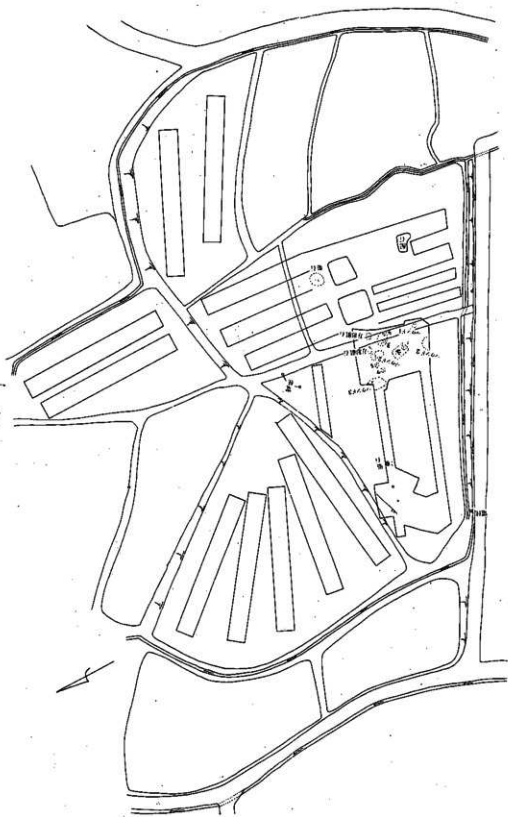


図版 27 調査地区出土の各種石器

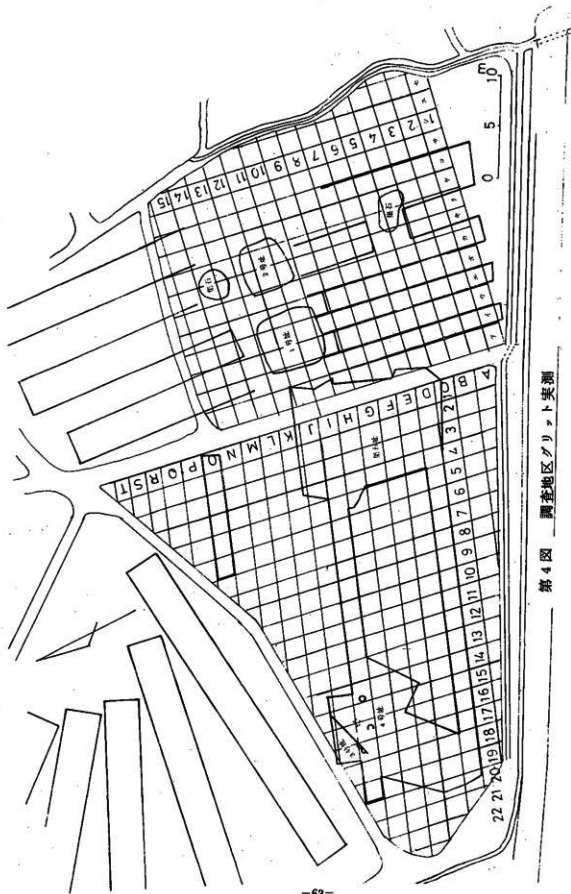


第1図 今井こぶし畑遺跡付近地形図と縄文遺跡の分布

- | | | | | | |
|----|------------------|----|------------------|----|---------------|
| 1 | こぶし畑遺跡 | 2 | 上今井岩垂原ポイント出土地 | 3 | 下今井合戦場ポイント出土地 |
| 4 | 今井西原ポイント出土地 | 5 | 福原ポイント出土地 | 6 | 洗馬戸ノ田ポイント出土地 |
| 7 | 桔梗ヶ原北ポイント出土地 | 8 | 丘中学校跡地先土器時代石器出土地 | 9 | 高出北ノ原ポイント出土地 |
| 10 | 高出黒鹿ポイント等出土地 | 11 | 桔梗ヶ原西ポイント出土地 | 12 | 平出遺跡早期縄文土器出土地 |
| 13 | 平出長田南遺跡早期縄文土器出土地 | | | | |



第3図 調査地区全域実測

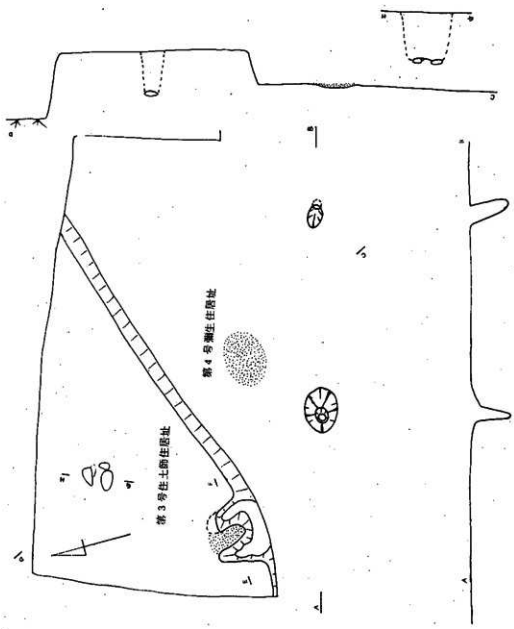


第4図 調査地区グリッド実測

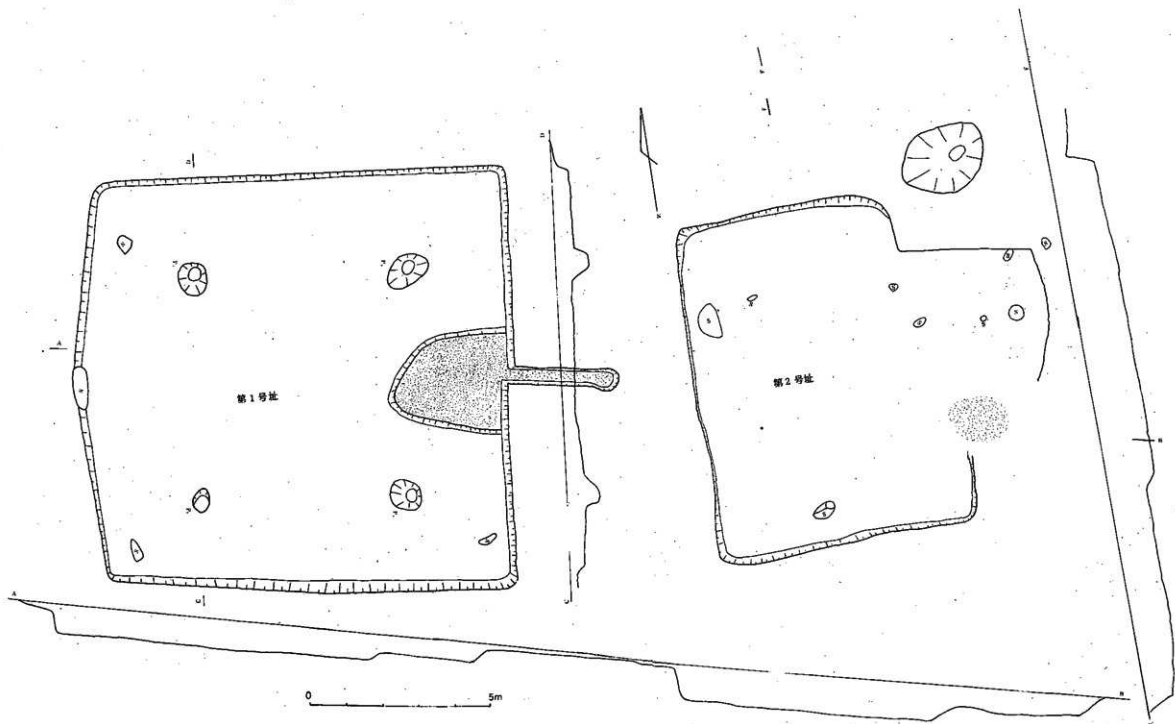


第5图 集石部平面实测

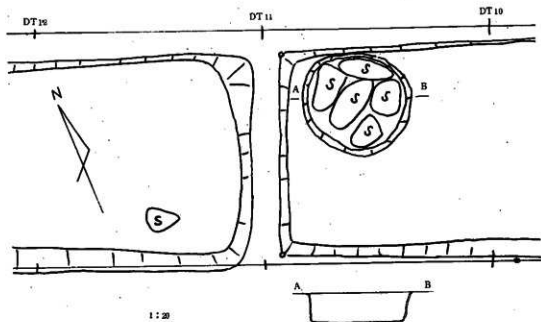




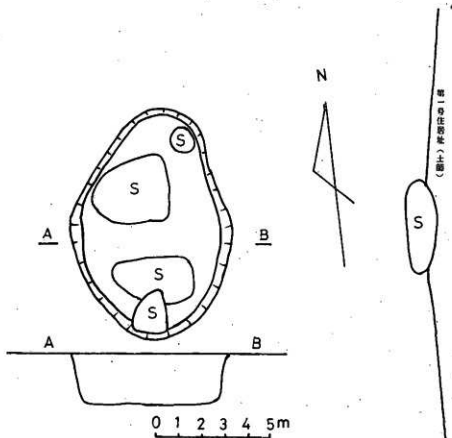
第6图 第3号住居址と第4号住居址



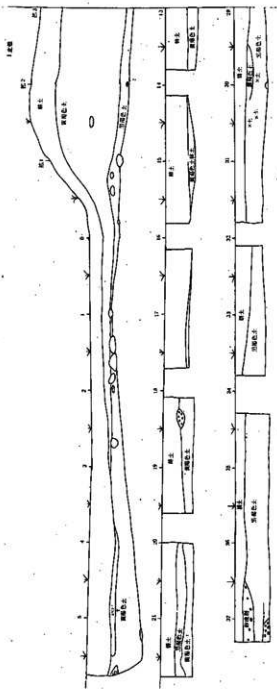
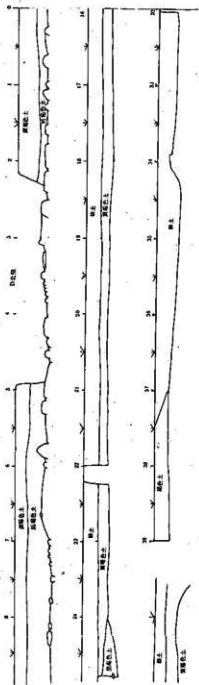
第7图 土師第1号・第2号住居址実測

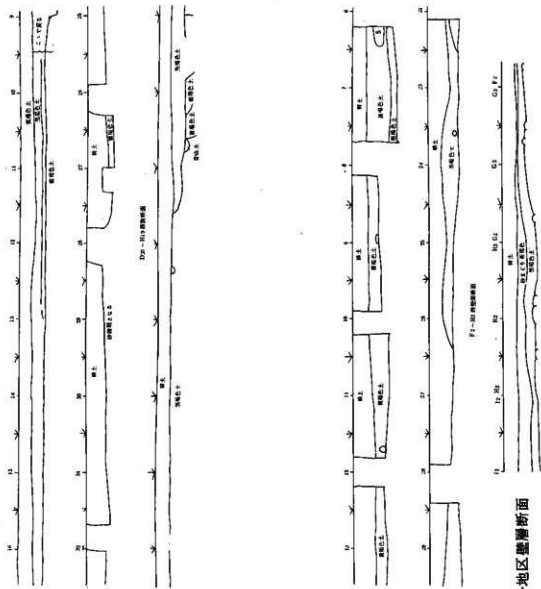


1:20
第8図 Dトレンチ土壌実測

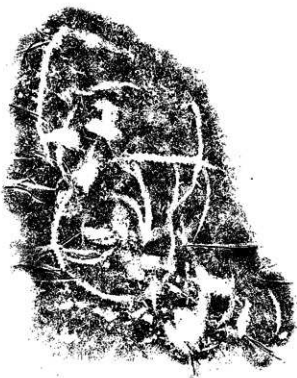


第9図 Iトレンチ拡張部ア10の土壌実測

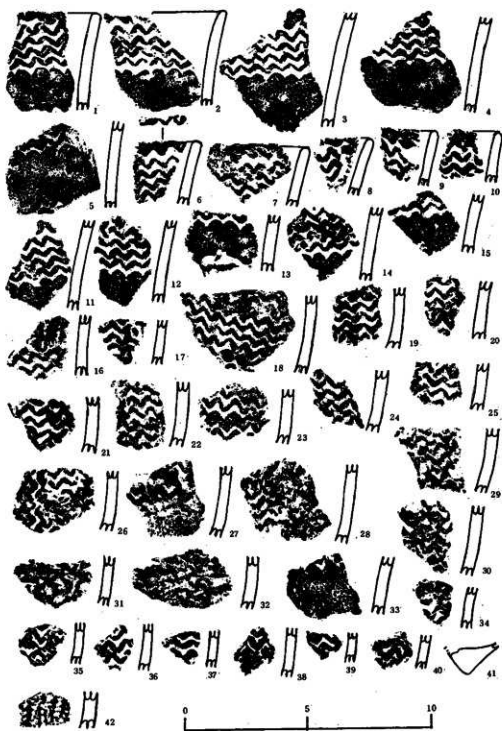




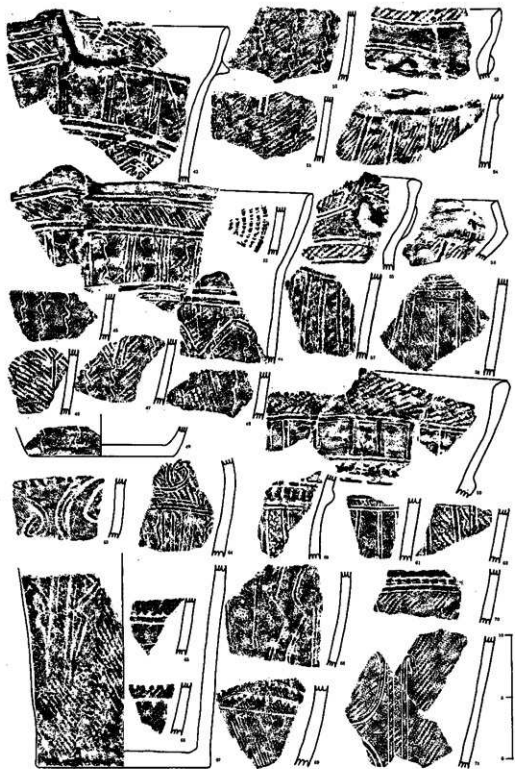
第10图 各地区震层断面



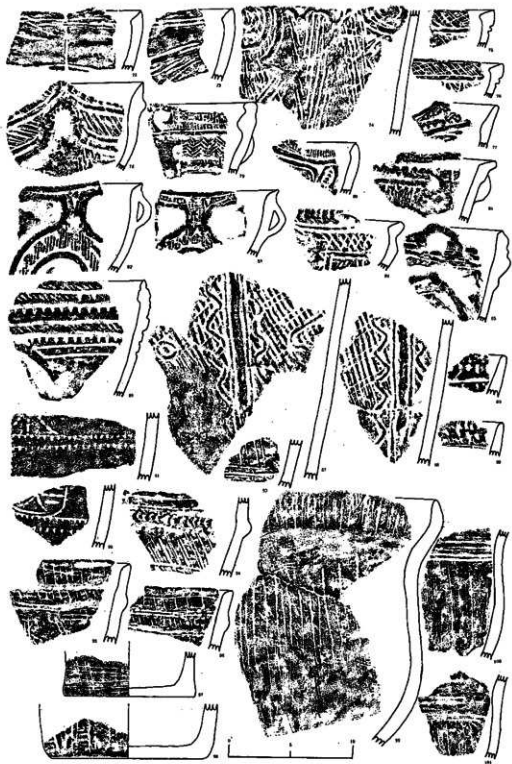
第11図 線刻のある石の拓影



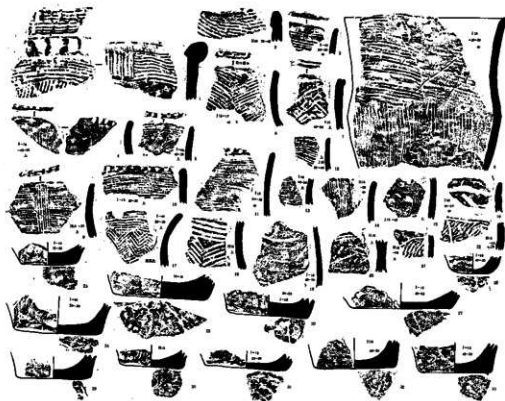
第 12 図 繩文第 1 類土器拓影



第 13 圖 繩文第 2 類・3 類土器拓影



第 14 图 绳文第 3 类・4 类・5 类・6 类・7 类土器拓影



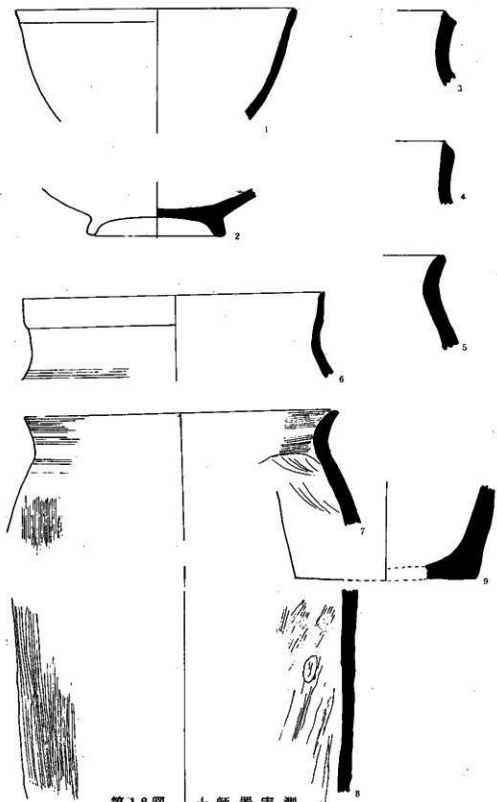
第 15 图 第 4 号住居址出土彌生土器拓影



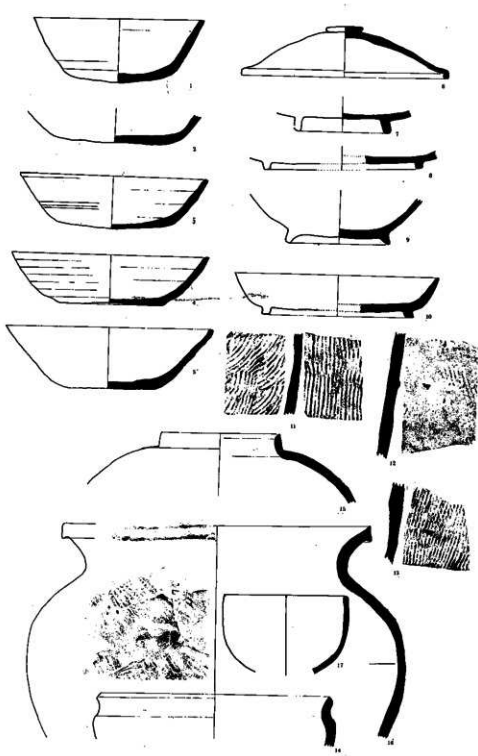
第16図 A～S地区出土の彌生土器拓影



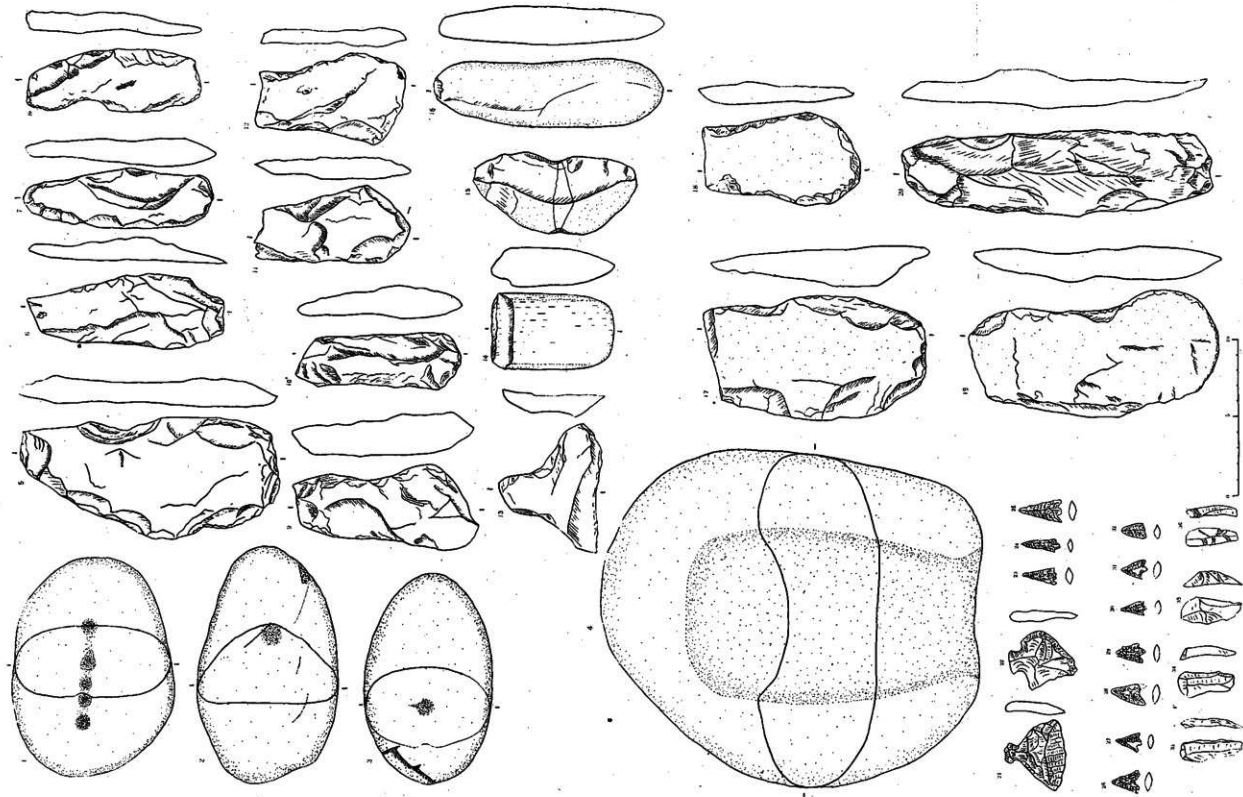
第 17 图 7 地区出土潮生土器拓影



第18図 土師器実測



第 19 图 须惠器・施釉陶器实测



第20圖 石器英測

長野県松本市今井こぶし畑遺跡
緊急発掘調査概報

昭和48年度

昭和49年3月31日 印刷

昭和49年3月31日 発行

発行者 長野県中信土地改良事務所
長野県松本市教育委員会

編集者 調査団代表 原 嘉 藤

印刷所 松本市開智2丁目3の33
すみれタイプ

(非売品)
